

日本・エチオピア・中国

—17世紀前半のイエズス会公刊年報から見た宣教の位相—

中 砂 明 徳

はじめに

ローマ出身の稀代の「巡礼者 (il Pellegrino)」¹ ピエトロ・デッラ・ヴァッレ (1586-1652) は、トルコ・ペルシアに続き、インドにまで足をのばした。彼が本国の友人に送った書簡は帰国後に3部構成で出版され、イタリア語から複数の言語に翻訳されて当時大いに好評を博したが、インド篇は死後の出版 (1663) になる²。そこに収められた1624年11月4日付書簡では、異教徒に圍繞されているのに、各修道会も市民もパフォーマンスとしての宗教行列にうつつを抜かしているゴアの現状にあきれているが³、この書簡にはゴアを東方布教の基地とするイエズス会に関連する記事やカトリック信者としてのヴァッレの関心事が集中的に述べられている。

同年2月1日、日本から殉教のニュースが入り、歓喜の鐘が打ち鳴らされた。デッラ・ヴァッレは同国人であるカルロ・スピノラ、カミロ・コスタンツォ、ピエトロ・パオ

¹ デッラ・ヴァッレの通称である。もともと、エルサレムへの巡礼を目指して1614年に旅に出たが、それを達成すると、本国から「身を固めるために帰国せよ」と言ってきたのを振り切って旅を続け、故郷のローマにもどったのは1626年である。デッラ・ヴァッレについては、ヨーロッパの研究者が今日にいたるまで様々に取り上げてきているが、ここでは日本語で読めるものとして、前田弘毅「ピエトロ・デッラ・ヴァッレの旅—17世紀イタリア人貴族の見た「イラン社会」*Ex Oriente* 21, 2015, pp.33-60 を挙げておくにとどめる。

² インド篇の英訳の校注本がハクルート叢書に収録される。Edward Grey, ed., *The travels of Pietro della Valle in India: from the old English translation of 1664, by G.Haver*, London, 1892. 以下、旅行記に言及する時は3部をまとめた1843年版 (*Viaggi di Pietro della Valle il Pellegrino descritti da lui medesimo in lettere familiari all'erudito suo amico Mario Schipano divisi in tre parti cioè La Turchia, La Persia e L' India colla vita e ritratto dell'autore*, Brighton (実際にはトリノで刊行) とハクルート版の箇所を併記する。

³ 1843 ed. vol.2, p.766, Hakluyt, p.415.

口の名前しか挙げていないが⁴、いわゆる元和大殉教などの殉教者の情報が一年半後にカトリックの東方の総本山に届いたのである⁵。

ザビエルの列聖を記念する祝祭の締めくくりとして、19日にイエズス会の旧サン・パウロ学院にあったザビエルの遺体がゴアの目抜き通りの中を運ばれた⁶。すでに前年にロヨラとザビエルの列聖の報がゴアに伝わっており、デッラ・ヴァッレは前簡(1624.1.31)で同年1月25日にイエズス会の新たに移転したサン・パウロ学院で列聖の祝典が行われたことに言及するとともに、そのコレジオ移転をめぐる近隣のアウグスティノ会と訴訟沙汰が起こり⁷、ゴア市当局さらにその声を承けた本国の王も新コレジオの破壊を命じたが、イエズス会がこれに従わないどころか、さらに地所を拡大していることを指摘し⁸、他の修道会との軋轢、イエズス会の権勢の大きさを伝えている。

⁴ 1843 ed. vol.2, p.763, Hakluyt, p.409.

⁵ カルロ・スピノラは1622年9月10日に長崎の西坂で55人が処刑された「元和の大殉教」で、ピエトロ・パウロ・ナヴァッロは11月1日に島原で日本人3人と、カミロ・コスタンツォは9月15日に平戸で処刑された。元和の大殉教については400周年記念の論文集として、川村信三・清水有子編『きりしたん1622：殉教・列聖・布教聖省400年の省察』教文館, 2024が刊行された。

⁶ 1843 ed. vol.2, p.765, Hakluyt, p.413. M. A. Katritzky, "The theatrical impact of St Francis Xavier's canonization: Pietro Della Valle's account of the 1624 Jesuit festivities in Goa," *Ludica. Annali di storia e civiltà del gioco* 2013-2014 (19-20), pp. 24-38 は、デッラ・ヴァッレの詳細な記述とイエズス会士自身の記述などを利用してこの時の一連の祭典を描く。

⁷ リアム・ブロッキーがイエズス会の巡察師アンドレ・パルメイロについての著書の中で、彼のゴア滞在期の最も激しい争いとしてこの事件を詳細に取り上げている。イエズス会の施設拡張計画が近隣のアウグスティノ会のノッサ・セニョーラ・ダ・グラサ修道院や同会の女子修道院を刺激し、副王がイエズス会側に立ったために、アウグスティノ会は市の参事会さらには本国の王に訴えたこと、イエズス会が本国からの回答の遅れを見越して工事を続行したこと、その結果として女子修道院の内部をコレジオに在籍する青少年が眺め下ろし、その静謐を台無しにしたこと、1621年にイエズス会がセミナリオを旧コレジオに移すことに同意したものの、他のクラスや修練院の移動は拒否したこと、パルメイロが新コレジオに否定的なローマからの指示によって、1624年1月に会議を開いて修練院の撤退をローマに提案したこと、24年の晩春に副王がアウグスティノ会に左袒する王の意向を伝えたこと、これを受けてイエズス会が7月に修練院の撤退を決めたことを記し、イエズス会にとっての敗北 (defeat) とする。後述するように、ブロッキーはデッラ・ヴァッレの書簡を見ているはずだが、ここでは言及していない。Liam Brockey, *The Visitor: André Palmeiro and the Jesuits in Asia*, Cambridge MA, 2014, pp.166-171.

⁸ 1843 ed. vol.2, pp.759-760, Hakluyt, pp.402-404.

件の宗教行列についても、フランシスコ会以外の修道会が参加しなかったと述べ、「他の修道会士は常々イエズス会の行列には参加せず、その理由はイエズス会も他会の行列に参加していないからだという」とコメントを加える⁹。

また、マスカットの財務官からゴアの異端審問官への手紙が5月10日に到着した。そこにはアレポ駐在のフランスのコンスルからの情報として、教皇グレゴリウス15世が亡くなり、新教皇ウルバヌス8世が即位したことが述べられていた。17日にはバヌアからその続報とともに、スペインではイギリスの王太子とスペインの王女との結婚が成立し、イギリスで「良心の自由 (libertà di coscienza)」が認められ、ロンドンに4つのカトリックのための教会が建てられることになったという報が入ったと記す¹⁰。ロヨラとザビエルの列聖を認めたのは、前年の7月8日¹¹に亡くなったグレゴリウス、二年後にローマに帰ったデッラ・ヴァッレを迎えたのがウルバヌスであった。西・英の縁組成立が誤報だったことは9月に到着したポルトガルの船団から明らかになる¹²。彼をペルシアからインドに渡してくれたイギリス人船長はおそらくカトリックではないが¹³、船中でも親しく話していた様子だし、インドに到着するとオランダ東インド会社のスーラト商館長ピーテル・ファン・デン・ブルックの世話になっているのだが¹⁴、カトリック教会の動静に一喜一憂していたことは確かであった。

5月11日に中国に向かう船団の最後の1隻が出発したが、そこには「友人の神父モレホンとヴェンシスラウ・パンタローネ」が乗船していた¹⁵。前者については、名前が挙がるだけで、交流の記述はない。スペイン人のイエズス会士ペドロ・モレホン(1562-1639)は日本で宣教し、1614年に他の宣教師と国外追放された後、その状況を

⁹ 1843 ed. vol.2, p.765, Hakluyt, pp.413-414.

¹⁰ 1843 ed. vol.2, pp.772-773, Hakluyt, pp.423-425.

¹¹ デッラ・ヴァッレに伝わったニュースでは7月29日。

¹² 1843 ed. vol.2, p.782, Hakluyt, p.438.

¹³ スピッツベルゲン島を発見した(デッラ・ヴァッレはグリーンランドと聞かされたようだが)ニコラス・ウッドコックで、ホルムズの争奪戦にも参加した。1843 ed. vol.2, pp.490-491, Hakluyt, pp.5-6.

¹⁴ 1843 ed. vol.2, pp.506-509, Hakluyt, pp.25-29. 彼がよこした通訳はアルメニア人で、デッラ・ヴァッレがペルシアで会っていたドミニコ会士の兄弟でもあった。

¹⁵ 1843 ed. vol.2, p.772, Hakluyt, p.425 にはモレホンに関する注釈はないだけでなく、索引にもとられていない。それは先のイタリア人三会士についても同様である。

伝えるべく、マニラ・太平洋経由でヨーロッパに戻り、再び日本の地を目指しているところだった¹⁶。ヴェンシスラウ・パンタレオン・キルヴィツァー（1588-1626）は、マテオ・リッチの死後に中国布教を報告しにヨーロッパに赴いたニコラ・トリゴーが引き連れてきた宣教団の一員で、同行したアダム・シャルとともに、天文学の才が買われての参加であったと思われる¹⁷。彼は前年の書簡（1623.4.27）にも登場しており、そこでは、彼から中国の地理書を見せてもらったデッラ・ヴァッレが漢字の縦書きと字数の莫大さについて感想を漏らしている¹⁸。デッラ・ヴァッレはキルヴィツァーに自著のラテン語ペルシア地誌を与えており¹⁹、それぞれが未知の国の地理書を交換した

¹⁶ モレホンの経歴・著述については、佐久間正訳『ペドロ・モレホン 日本殉教録』キリシタン文化研究会、1974のフーベルト・チースリク神父の解説が今なお最も周到である。ほかには、Eduardo Alonso Romo, “Pedro Morejón: vida obra e itinerario transoceánico de un jesuita Castellano,” José Martínez Milán et al. eds., *Los jesuitas: religion, política y educación (siglos XVI-XVII)* tomo 3, Madrid, 2012, pp.1551-1572 などがある。

¹⁷ 彼がマカオに到着した時期を *Louis Pfister, Notices biographiques et bibliographiques sur les jésuites de l'ancienne mission de Chine 1552-1773*, Chang-hai, 1932, p.160 は 1620 年とし、Charles E. O' Neill S.I. and Joaquín Maria Dominguez S.I. eds., *Diccionario Histórico de la Compañía de Jesús: Biográfico-temático* (以下、*DHCJ* と略称), Roma/Madrid, 2001, tomo 3, p.2199 は 1619 年 7 月 15 日とする。いずれも、マカオについてからの行迹についてはあいまいな記述しかしていないが、これを見れば、彼が一度インドに戻って、再び東に向かったことがわかる。五野井隆史が引用する巡察師ジェロニモ・ロドリゲスの総長あて 1624 年 12 月 10 日書簡に、モレホンとキルヴィツァーがマラッカからシャムに渡航する理由を総長に書き送ったとある。また、五野井はバードレ・ヴェンセスラオ・ランタリアン（ママ）が 1625 年 10 月 30 日付セバスチャン・ヴィエイラ宛書簡で、シャムでスペイン船がおこしたトラブルを收拾する使者として当時マニラにいたモレホンが選ばれた理由を説明していることを指摘する（『徳川初期キリシタン史研究 補訂版』吉川弘文館、1992, pp.227, 236）。キルヴィツァーはマニラさらにはマカオまで終始モレホンとともに行動したのであろう。

¹⁸ 1843 ed. vol.2, pp.598-599, Hakluyt, p.165.

¹⁹ 書簡では地誌作成について触れるが、神父に献呈したことは記されない。デッラ・ヴァッレが帰国後に改訂したもの 2 点がモデナの Biblioteca Estense Universitaria に所蔵されている。その末尾にも当初の献辞が残され、キリスト教の増進を目指す点では我々は同志だと述べ、別れを告げている。日付は 1624 年 2 月で、これは彼から神父への餞別でもあった。Sonja Brentjes and Volkmar Schüller, “Pietro della Valle’s Latin Geography of Safavid Iran (1624-1628),” *Journal of Early Modern History* 10-3, 2006, pp.169-219 がこの地誌の英訳を提供しているが、デッラ・ヴァッレが中国の地理書をもったことについては言及していない。これは、おそらくのちにマルティノ・マルティニが中国のアトラスを作った時に参照した陸応陽『広輿図』であろう。拙稿「マルティニ・アトラス再考」金田章裕・藤井譲治・杉山正明編『大地の肖像』京都大学学術出版会、2012, pp.116-140 を参照。

ことになる。

モレホンらと入れ替わりに5月20日にモザンビークから到着した艦隊の「第一船」にはエチオピア教会をローマ・カトリックの統制下に置こうとする宣教団が乗っていた。これは、デッラ・ヴァッレが名を挙げている司教ジョアン・ダ・ローシャが載っていた船で²⁰、前年にリスボンを出航し、モザンビークで越冬後、インドに着いたのだった。アフォンソ・メンデス総大司教（1579-1659）が乗る船については29日に到着したとしている²¹。「すでにカトリック信者になったとされるエチオピア王の招請を受けた」ものとするが、エチオピアにおけるカトリック信仰の進展については独自の情報は持たないと述べ、文通相手のマリオ・スキバーノに対して「彼らの年報」の参照を求める。彼が旅をしている間に、イエズス会のエチオピア宣教の記事がイタリア語で公刊されるようになっていた（後述）。

デッラ・ヴァッレはイエズス会の巡察師から「エチオピアに様々なルートから会士を送り込む予定だ」と聞き、それを具体的に紹介している²²。後日、ローマにもどった彼自身が近東を歩いて得た知識をもとに布教聖省からジョージアに送り込まれたテアティノ会宣教団に対して様々なルートを示すことになる²³。

6月7日、総大司教をイエズス会のコレジオに訪問すると、神父たちはエチオピア

²⁰ 1843 ed. vol.2, pp.775-776, Hakluyt, p.429.

²¹ 1843 ed. vol.2, p. 777, Hakluyt, pp.432-433. メンデス自身の記述（1625.7.9, エチオピアのフェルモナ発書簡）には、5月28日に到着したとする。五野井隆史編集『大分県先哲叢書 ベトロ岐部カスイ資料集』大分県教育委員会, 1995, p.184. 五野井はこれに基づいてベトロ岐部のゴア到着を5月28日とする（『ベトロ岐部カスイ』教文館, 2008, p.180）が、岐部が先行船かそれともメンデスの船に乗っていたかはわからない。メンデスはゴアに5か月滞在し、11月17日にゴアを出て、エチオピアに向かう宣教師のスタート地点であるインド北西岸のディーウに向かった。メンデスは、ゴア滞在中のことについては、巡察師（アンドレ・パルメイロ）の配慮、「俗人」たちがこの布教に示した熱意、とりわけ提督伯爵（副王フランシスコ・ダ・ガマ。ヴァスコ・ダ・ガマの一族で、叔父のクリストフォロは1542年にエチオピアで戦死）の支援（1622年に奪われたホルムズ奪回のために船団を派遣しなければならなかった中で支援を約束した）に触れるのみである。C. Beccari ed., *Rerum Aethiopicarum scriptores occidentales*, XII, Roma, 1912, p.133.

²² 1843 ed. vol.2, p.778, Hakluyt, pp.429-430. 宣教団に対するインドのイエズス会士たちの反応については、Brockey, *op.cit.*, p.183を参照。

²³ Elizabetta Borromeo, "Pietro della Valle e l'ars peregrinandi", *Miscellanea di Storia delle esplorazione* 22, pp.103-128.

に着いたら、デッラ・ヴァッレが帰っているかもしれないローマに手紙を送ろうと約束したというが²⁴、文通の痕跡は残っていない。ポルトガル人のイエズス会士でインド巡察のアンドレ・パルメイロ（1569-1635）をデッラ・ヴァッレはやはり「友人」と呼び、彼が11月4日にゴアを出航したことを記している²⁵。

パルメイロは、1624年11月1日の総長あて書簡で、「ローマの貴族 Pero de la Valhe」が総長の推薦通りの人物 (fidalgo romano e muy encomendado de V(ostra).P(aternidade)) であり²⁶、会のために働こうとしているので、この手紙を陸路で戻る (se vay por terra) 彼に託送すると述べている²⁷。

このように、デッラ・ヴァッレとイエズス会の交流にはなかなか深いものがありそうに見える。前述したように彼はスーラトに上陸してオランダ人の歓待を受けたが、そこからカンバヤに小旅行した際に、アグラに向かうべくゴアからやってきたイエズス会の神父に会いにゆき、ダマンやバッセインにいる会士への紹介状をもらっている。この時にムガル宮廷に仕えるアグラの会士への手紙も託したと述べるついでに、ペルシア滞在時にも彼らに手紙を送って、ペルシア語の本をローマで出版したいから送ってくれるよう頼んでいたと付け加える²⁸。そして、その紹介状をダマンのコレジオの院

²⁴ 1843 ed. vol.2, p.779, Hakluyt, pp.434-435. ペルシアで知りあい、ローマへの手紙を託したポルトガル人兵士が、デッラ・ヴァッレの実家に滞在後、リスボンから出航し、モザンビークで宣教団と合流して同船して戻ってきていた。デッラ・ヴァッレは彼にエチオピア語を教え、その教本も与えたという。

²⁵ 1843 ed. vol.2, p.787, Hakluyt, p.445. ブロッキーは巡察師とデッラ・ヴァッレの出会いについて、前述の列聖祭典とのかかわりで触れ、彼の記述を援用する。op.cit., pp.163-166.

²⁶ ヴァッレが総長の推薦状を持っていたという記述（1843 ed., p.595, Hakluyt, p.159）と照応するように見えるが、彼がローマを出た時の総長クラウディオ・アックァヴィーヴァはその翌年に亡くなり、総長はムテオ・ヴィテレスキに代わっている。ただ、パルメイロを「友人」とする記述はここから裏付けられる。

²⁷ Beccari, XII, p.87.

²⁸ 1843 ed. vol.2, p.569, Hakluyt, p.117. ペルシア語の本とは、ヘロニモ・ザビエルの諸著作であろう。ザビエルの著作については、真下裕之「帝国のなかの福音—ムガル帝国におけるペルシア語キリスト教典籍とその周辺」斎藤晃編『宣教と適応 グローバル・ミッションの近世』名古屋大学出版会、2020, pp.236-283 参照。デッラ・ヴァッレはペルシアでイスラームの知識人と論戦し、その内容をのちに文章にまとめ、ローマに持ち帰り、出版を準備したが、刊行されなかった。Paola Orsatti, "Uno scritto ritrovato di Pietro Della Valle e la polemica religiosa nella storia degli studi sul persiano," *Rivista degli Studi Orientali* 64, 1992, pp.267-274. また、カルメル会士がペルシア語に訳した「詩篇」を出版すれば宣教に役立つと述べている（1619.4.22 書簡）。1843 ed. vol.1,

長アントニオ・アルベルティーノに送り、ペルシアで亡くなった妻（アッシリア人の元ネストリウス派信者）の遺体を無事にダマンまで運ぶための船の調達を依頼している²⁹。

ゴアに着いた時点で、いきなり「総長による推薦状を持っていた」と述べるのにはいささか驚かされるが（1623.4.27 書簡）³⁰、彼がローマの貴族であることを考えれば不思議ではない。税関での手続きを済ませ、イエズス会の住院に赴き、巡察師以下と会った。当時、住院にいたイタリア人神父として、「ミラノ出身で数学の大家であるクリストフォロ・ボッリ」³¹「のちに私の聴罪師となるジュリアーノ・バルディノッティ」³²の名を挙げている。

しかし、イエズス会への言及はインドに来てから俄かに増えるのであって、それまではほとんど出てこない。コンスタンティノープルから出した手紙には「後発のイエズス会は教会を一つしか持っていなかった」と述べるだけで（1614.10.25 書簡）³³、会士との交流には触れない。のちにバグダッドからの発信において、コンスタンティノー

p.737.

²⁹ 1843 ed. vol.2, p.573, Hakluyt, p.121.

³⁰ 注 26。

³¹ ボッリはすでにコーチシナでの布教を終えてインドに戻ってきたところだったが、デッラ・ヴァッレはそのことには触れない。ボッリは、翌年2月、デッラ・ヴァッレとペルシアで遭遇し肌が合わなかったスペイン大使ガルシア・デ・シルバ・イ・フィゲロアとともに帰国の途につき、コインブラヤリスポンのコレジオで数学を講じた後、1630年にローマに到着、翌年コーチシナでの布教記録を公刊した。しかし、先にローマにもどっていたデッラ・ヴァッレのみならず、ポルトガル王権（スペイン王）や布教聖省が注目していたのは、彼が考案したインド航海用の海図と観測機械であった。実際、海図の正しさが実証されて声価を高めたものの、彼がローマで脱会后1632年に急死したこともあって、彼が残した資料（デッラ・ヴァッレは、イエズス会士で太陽黒点をめぐりガリレオと論争したクリストフ・シャイナーが大部分をドイツに持ちかえたという）をめぐる探査を、ローマで彼と旧交を温めていたデッラ・ヴァッレは長く続けたようで、これに関して布教聖省の秘書であるフランチェスコ・インゴリヤポルトガル王に報告している（後者の日付は1650年でデッラ・ヴァッレの死の二年前である）。この未刊の書簡を翻刻し、注解を加えたのが、Mercati, Angelo, “Notizie sul Gesuita Cristoforo Borri e su sue “inventioni” da carte finora sconosciute di Pietro della Valle, il Pellegrino,” *Pontificia Academia Scientiarum, Acta* 17, pp. 25-46 である。

³² バルディノッティはマカオに向かったが、日本には入国できず、1626年トンキン（ヴェトナム北部）にイエズス会士として一番乗りを果たした。“La Relation sur le Tonkin du P. Baldinotti,” *Bulletin de l'Ecole française d' Extrême-Orient* 3, 1903, pp.71-78.

³³ 1843 ed. vol.1, p.26.

プルでのイエズス会逮捕³⁴のニュースに触れ、彼らに託した日記に宮廷のことを記した部分がある—彼はヴェネチア大使に随行してトプカプに入り、スルタンの尊顔をちらりとだけ見ている³⁵—ので彼らに累が及びはしないかと心配している（1616.12.10 書簡）³⁶。彼にとって大事な記録³⁷をイエズス会士に託したのだから、やはりそれなりの交流があったのだろう。

しかし、以後イエズス会への言及がなくなるのは当然のことであって、デッラ・ヴァッレが長逗留したイスファハーン宮廷ではアウグスティノ会・カルメル会士が存在感を示していたが³⁸、イエズス会は進出できなかった。ザビエルの後継者であるガスパル・ベルゼのホルムズでの活動はイエズス会にとっては宣教の一大トピックであったが³⁹、

³⁴ デッラ・ヴァッレ滞在時にも「外国人には厳しい雰囲気があった」という（1843 ed. vol.1, p.71）。彼は原因には触れないが、1609年にスペインからモリスコが追放され、この地に身を寄せた者たちがオスマン政府にキリスト教徒の横暴を訴えたことが原因だった。Tijana Krstic, “The Elusive Intermediaries: Moriscos in Ottoman and Western European Diplomatic Sources from Constantinople, 1560s-1630s,” *Journal of Early Modern History*, 19-2/3, 2015, pp.129-151. なお、イスファハーンから発出した1617年12月18日付書簡では、当地にやってきたイギリス人に対して、カトリック信者の間で彼にどう接すべきか議論した際に、「王（アッバース）にクリスチャンが分裂しているのを見せるのは得策ではなく、宗教的には不和でも俗的利益においては一致していることを示したほうがよい」という意見が出ると、デッラ・ヴァッレはよそでは喧嘩していたイエズス会士とイギリス人やオランダ人がコンスタンティノープルでは協力していた事例を引き、これに賛成したと述べている（1843 ed. vol.1, p.547.）。日本をはじめ各所で新旧教徒は足の引っ張り合いをしていたが、オスマン政府に対しては互いの中傷をしても意味がなかったということだろう。

³⁵ 1843 ed. vol.1, p.106.

³⁶ 1843 ed. vol.1, p.389.

³⁷ 彼が早くから公表を想定していた書簡と違って、日記は出版されなかった。しかし、彼は文通相手のスキパーノに出した手紙の写しを手元に保存しておらず、日記に大体のことが書いてあると述べる（1616.9.21 書簡 1843 ed. vol.1, p.345）。のちに帰国して書簡集を出版する際に、日記と照合して訂正したことが指摘されている。彼の日記は、パチカン図書館に所蔵され（cod. *Ottob. lat.* 3382）、そのうちベルシアの部分がまず刊行された。Mario Vitalone, ed., *Diario di viaggio in Persia (1617-1623)*, Roma, 2023. ローマ帰還後の日記についても、Gianni Venditti ed., *Diario di Pietro della Valle di alcune cose memorabili*, Roma, 2019 が刊行されている。

³⁸ アウグスティノ会については、John Flannery, *The Mission of the Portuguese Augustinians to Persia and Beyond (1602-1747)*, Leiden/Boston, 2013, カルメル会については、Herbert Chick ed., *A Chronicle of the Carmelites in Persia: The Safavids and the Papal Mission of the 17th and 18th Centuries*, 2vols, New York, 2012 を参照。

³⁹ 拙稿「17世紀のグローバルなキリスト教会史—コルネリウス・ハザルト『世界教会史』の射程—」『京都大学文学部研究紀要』62, 2023, pp.294-295, 同「『日出づる処から日没する処まで我

そこから内陸には進めず、他会に先を越されていたのである。

デッラ・ヴァッレが旅をしていた17世紀の10-20年代において、海外布教のシーンでイエズス会が圧倒的な存在感を持っていたのは事実だが、その布教地図には濃淡があり、イスラーム圏では大苦戦していた。インドでも、布教に成功したと言えるのは、もっぱらポルトガルの勢力圏に限定されていた。

イエズス会の布教の第一の成功事例は、迫害が強化され、殉教者が続々と生まれつつあってもなお（それだからこそ、というべきかもしれない）日本であり、ついでマテオ・リッチ以後も迫害による一頓挫はありつつも、教線を徐々に拡張していた中国、そしてデッラ・ヴァッレがゴアで出会った宣教団が向かおうとしていたエチオピアであった。

前掲のモレホンはデッラ・ヴァッレに会う前に、リスボンで1621年に *Historia y relacion de lo sucedido en los reinos de Japon y China, en la qual se continua la gran persecucion que ha avido en aquella Iglesia, desde el anno de 615. hasta el de 19*（「1615年から19年までに教会の大迫害が続いた日本・シナ王国の出来事の歴史と報告」）を刊行し、表題通り日本と中国における迫害を同時並行しているものとして描いているが、中国を記述する第四部の後半でエチオピアでの朗報を伝えている⁴⁰。そして、彼がマカオにおいてまとめた新しい殉教録（1627.3.31作成）は翌年メキシコで *Triumphos, Coronas, Tropheos de la perseguida Iglesia de Japon*（日本の迫害された教会の勝利、栄冠、トロフィー）にも、前作と照応するかのようになり、第二部の途中から中国の1619年から26年に至る状況⁴¹と、エチオピア教会とローマ教会の「合同」に向かう動きについて述べている。マカオにいたのだから、前作の時点より中国の情報は入りやすかったのだが、むしろ熱が入っているように見えるのはエチオピアの紹介である。皇帝のインド副王・イエズス会インド管区長宛書簡、在エチオピアの会士ルイス・デ・アゼヴェドのインド巡察師（前掲のパルメイロ）宛書簡と引用が続く。手紙の宛先をみればわ

が名は人々の間で大ならん」—17世紀初フランス人イエズス会士の世界布教鳥瞰—『京都大学文学部研究紀要』63, 2024, pp.343-347を参照。

⁴⁰ 本書の日本語訳が『ベドゥロ・モレホン 続日本殉教録』野間一正・佐久間正訳、キリシタン文化研究会、1973年だが、中国とエチオピアの部分は省略されている。

⁴¹ 一大ニュースであった1625年の石碑（大秦景教流行中国碑）の発見を第二章で報じている。

かるように、マカオでは比較的入手しやすいものではあるが、できるだけ新しい情報を伝えようとする意図がうかがわれる。モレホン自身がメキシコでの出版を想定していたかはわからない。彼はこの時期盛んにマカオとマニラの間を往還していたので、メキシコ経由でヨーロッパに伝えられることは考えていただろうが、メキシコの会士が前作の続きとして出版したということかもしれない。いずれにせよ、エチオピア情報がヨーロッパだけでなく、メキシコにも伝わったのである。

筆者は前二稿でカトリックの海外布教が頭打ちになりつつあった17世紀後半に著された南ネーデルラントのイエズス会士コルネリウス・ハザルトの『世界教会史』、17世紀初年のイエズス会の世界進出の高潮を背景にしてフランスのイエズス会士ピエール・デュ・ジャリックが著したポルトガル王の布教保護権下にある諸地域の布教史の内容を紹介するとともに、当時のイエズス会の布教の位相について論じた⁴²。前置きがいささか長くなったが、本稿では1610年～20年代のイエズス会の世界布教の状況を俯瞰するために、当時盛んにイタリア語で刊行され、フランス語をはじめ、ドイツ語、ラテン語、ポーランド語に翻訳されてヨーロッパ各地に普及したイエズス会の年報を検討する。

第1章 総年報⁴³

急速にメンバーを増やし、ヨーロッパそして世界へと拡大してゆくイエズス会の組織としての一体感を醸成すべく築かれた通信体系はこれまでも関心を集めてきたが、特に近年関連論文が増えてきている⁴⁴。しかし、初代総長ロヨラの秘書であったファン・アフォンソ・デ・ポランコのシステム構築など制度面に関心が集中し、その一つの帰

⁴² 注39。デュ・ジャリックの書のタイトルは *Histoire des choses plus memorables advenues tant ez Indes orientales, que autres païs de la descouverte des Portugois, en l'establissement & progres de la foy Chrestienne & Catholique* で、1608-14年にかけて三巻本で出版された。

⁴³ こうした名称があるわけではないが、本稿では諸管区 (provincia) の年報と区別するためにこのように呼ぶ。日本の年報と公刊のスタートがほぼ同じことから、両者を混同する記述が時に見られる。

⁴⁴ Paul Nelles, "Jesuit Letters," Ines G. Županov ed., *The Oxford Handbook of Jesuits*, Oxford, 2019, pp.44-72 がこれまでの研究をまとめていて便利である。

結点である総年報の出版は余り注目されていない。一つにはラテン語で書かれているということもあろうが、管区年報を各地の布教の重要な史料と考え、ラテン語で作成されたものが翻訳されている例もあるので⁴⁵、主な理由にはならない。やはり、二次的な「データ年鑑」とみなされていることが大きいであろう。

2008年にイエズス会の学術誌に出た2論文、なかでも一連の著作でイエズス会の組織を近世ヨーロッパの政治システム全体の変化の中に位置づけようとしているマルクス・フリードリヒの論文は総年報を正面から取り上げたものである⁴⁶。彼は海外からの布教報告と総年報を比較し、後者が現地の地誌・習俗を語るものでもなく、対象とする読者もイエズス会内に限定されていたとしたうえで⁴⁷、その内容の性格（会が盛んに巻き込まれていた神学的論争には触れず、具体的な「事実」ベースで会の活動をフォローする）、編集と流通を論じている。以下、これにもとづいて年報の推移について概観する⁴⁸。

各管区（ないし準管区）の年報は相互に交換されるものであり、なかにはローマ経由で他管区に送られる場合もあったが、1581年の第四回総会において、ローマで統一的に編集して出版することが決まった。当時、22を数えた管区⁴⁹から年報をローマに一通送ればよくなったということでもある⁵⁰。

総年報は1581年分から1591年分までが、ローマ学院の印刷所で1583年から1594年にかけて刊行された。ここまでは、海外の布教報告とその出版の間のタイム・ラグ

⁴⁵ 近年のものに、Wendy Laura Belcher ed., *The Jesuits in Ethiopia (1609-1641): Latin Letters in Translation*, translated by Jessica Wright and Leon Grek, Leiden/Boston, 2017, Vera Moynes ed., *Irish Jesuit Letters 1604-1674*, 2vols, Dublin, 2019がある。

⁴⁶ Markus Friedrich, "Circulating and Compiling the Litterae Annuae. Towards a History of the Jesuit System of Communication," *Archivum Historicum Societatis Iesu* 77, 2008, pp.3-39.

⁴⁷ id., pp.6-7. 総年報の俗語訳が公刊されることはなかった。

⁴⁸ 他に Annick Delfosse, "La correspondance jésuite: communication, union et mémoire, Les enjeux de la Formula Scribendi," *Revue d'histoire ecclésiastique* 104-1, 2009, pp.71-114も参照した。

⁴⁹ 管区成立—ポルトガル (1546)、スペイン (1547)、インド (1549)、イタリア (1552)、フランス (1552)、スペインをアラゴン・カスティーリャ・アンダルシアに三分 (1554)、ブラジル (1554)、高地ドイツ (1556)、イタリアをシチリア、ナポリ、ミラノ、ローマに分割 (1558)、オーストリア (1562)、ライン (1564)、アキタニア (1564)、ベルギー (1564)、メキシコ、ペルー (1567)、ポーランド (1574)、ヴェネチア (1578)、リヨン (1582)。

⁵⁰ Friedrich, op. cit., pp.14-16.

と変わらないが、ここで出版が中断した。1598年に総長アックァヴィーヴァが再開を命じ、1592, 93年分はそれぞれ1600, 1601年にフィレンツェで刊行され、以後ローマで刊行されることはなく、1594-97年分が1604-07年にナポリで、1598-99年分、1600-02年分が1607年にそれぞれリヨン、アントワープで刊行された。

ここでまた空白があり、1618-19年にかけて、1603-05年分がドゥエーで、1606-09年分がマインツで、1609-11年分がディリンゲン、1612-14年分はリヨンで出た⁵¹が、以後刊行は途絶える。なお、イタリア以外の出版地は後述するアジア各地からの年報の刊行地と重なる。

1629年までは準備作業は行われていたが、以後それさえなくなる。1643年以降新しいスタイルでの刊行が模索され、1650-54年分が刊行されたが、ここで完全に終了する。実は、この消長は各地からの報告の出版とほぼシンクロしている。

フリードリヒは如上の変遷を跡付けたうえで、1650-54総年報の復活は、これまでの管区内の地域別の記述をトピックごとの編成へと変え、ナラティブの一貫性よりも図表に見られるように統計的要素を重視したものへと変化したと論じる⁵²。

しかし、フリードリヒも同誌に併載されているヨルグ・ゼヒの論文も⁵³、総年報の記述の形態に焦点を当てて一方で、それらが描き出すイエズス会の地図には全く関心を払っていない。以下、この点について概観しておきたい。

まず、形式について述べておくと、序文が置かれることが少なく、総論にあたるものはほとんどない。各管区間の情報交換だと考えれば、納得はいく。ローマをはじめとするイタリア諸管区から始まるが、常に順番が決まっているわけではない。すべての管区の記述が出そうわけでもない。管区としての活動に重きがあるので、個人名が出てくることは多くないが、時にメンバーの死去の際に略伝が付されることがある。項目は主にコレジオ・レジデンシア単位で立てられ、時にミッションが立項されることがある。イエズス会の急速な展開はコレジオのヨーロッパ各地への展開に負うとこ

⁵¹ ディリンゲン版には刊行年が記されないが、フリードリヒもいうように、この時期に集中的に刊行されたとみてよい (id., p.11)。

⁵² id., pp.30-35.

⁵³ Jörg Zech, "Die Litterae Annuae der Jesuiten. Berichterstattung und Geschichtsschreibung in der alten Gesellschaft Jesu," *Archivum Historicum Societatis Iesu* 77, 2008, pp.41-61.

ろが大きい。

最初に刊行された1581年のものは、総218頁⁵⁴。編者は次年報とともに、ジョヴァンニ・アントニオ・ヴァルトリーノ。ローマ生まれの会士でこの時点ではローマ・コレジオで教えていた⁵⁵。序文の後、11頁からイタリアのローマ・シチリア・ナポリ・ミラノ・ヴェネチア管区の順に述べられ、73頁からルシタニア（ポルトガル）管区となり（アンゴラを含む）、87頁から104頁まで東インド（ゴア）管区だが、この中にはエチオピアを含む一方で、日本は入っていない。同じくポルトガルの布教保護権下にあったブラジル（pp.105-112）の次に、トレド・カステイーリャ・アラゴン・バエティカ（アンダルシア）のスペイン諸管区（pp.112-134）、メキシコ管区（pp.135-141）が来るが、ペルーはない。フランス・アキタニア（pp.141-167）、ライン・高地ドイツ・オーストリア（pp.168-204）の仏独語圏が続き、205頁以下は「諸ミッション」として、イングランド・マロン派・スウェーデンなどがとりあげられる。イングランドには、カトリック信者救済のために前年に会士エドモンド・キャンピオンが大陸から送り込まれたが、この年の末にタイバーンで刑場の露と消えた⁵⁶。しかし、この後、大陸に置かれたイングランド人宣教師養成のコレジオの記述を除けば、本シリーズに登場することはない。レバノンを中心としたマロン派はすでにローマ教会のもとに帰順していた。スウェーデンでは、教皇が派遣したアントニオ・ポッセヴィーノによる国王周辺への働きかけを扱い、末尾には彼のモスクワへの派遣に言及される⁵⁷。

続く1582年（1584年刊、総300頁）⁵⁸はほぼ同様の構成だが、東インドの記述にモ

⁵⁴ *Annuae litterae Societatis Iesu Anni MDLXXXI*. なお、以下の総年報や各地の年報の大半はインターネット上で閲覧した（最終閲覧は2024年10月31日）。該当書は、Münchener Digitalisierung Zentrumで閲覧した。以下、閲覧先を略号で示す。ミュンヘン・デジタル化センターは【M】、グーグル・ブックスは【G】、筑波大学ベッソン・コレクションは【B】、上智大学ラウレスキリタン文庫は【L】、フランス国立図書館のGallicaは【Ga】、HathiTrust デジタル・ライブラリーは【H】、Internet Archiveは【I】、Waterloo大学のサイトは【W】とする。

⁵⁵ *DHCJ*, tomo 4, p. 3881.

⁵⁶ pp.208-209.

⁵⁷ ポッセヴィーノのスウェーデンにおける活動については、John Patrick Donnelly, “Antonio Possevino. From secretary to papal legate in Sweden,” Thomas M. McCoog ed., *The Mercurian Project, Forming Jesuit Culture 1573-1580*, Rome and St. Louis, 2004, pp.323-349を参照。

⁵⁸ *Annuae litterae Societatis Iesu Anni MDLXXXII* 【G】

ゴル（ムガル）が加わる。アクバルの宮廷での活動を記したものだが、分量は多くない（pp.111-112）。一方、前年にはあったブラジルがない。フランスではリヨンが加わり（pp.162-168）、オーストリアのあとにベルギーが入る。そのあと、本書で最も紙幅が割かれているのは前掲のモスクワ・ミッションである。ポーランドとロシアとの間の調停に成功し、イヴァン4世と接触したポッセヴィーノの記録はそれまでのモスクワ情報を更新するものとして相当な影響力を持ったが⁵⁹、これを契機とした教皇庁とモスクワの接近はそれ以上の成果をもたらさなかった。スペインの海外領として、メキシコに加え、ペルーが取り上げられた（pp.273-300）。

1583年報⁶⁰（1585年刊、総231頁）の編者はニコロ・オルランディーニで、84・85年分の編者でもある。『イエズス会史第一部』を執筆（1614年刊行）した会の史官でもあった。

イタリアの中にコンスタンティノーブル・ミッションが入り込んでいる（pp.30-32）のは、この年にジュリオ・マンチネッリが教皇により正教会とローマの合同を目的として派遣されているからだが⁶¹、記事の中に彼個人の名前は言及されていない。そして、ポーランドに相当の紙幅が割かれる（pp.79-112）。前掲のポッセヴィーノがモスクワとの折衝に成功したことで王ステファン・バトリの信頼を得て各地にコレジオが作られ、教線はトランシルヴァニアまで拡大した⁶²。掉尾を飾るのは、総長の甥ルドルフォ・アックァヴィーヴァら5人のインド殉教の記事で、天正少年使節を率いて日本を出発してインドに戻ってきていたヴァリニャーノの書簡の引用である（pp.215-231）。

1584年報（1586年刊、総351頁）⁶³は、基本的な構成は前年と変わらないが、末尾にエジプト探査（Aegyptiaca expeditio）の記事が置かれ（pp.336-351）、コプト教会のロー

⁵⁹ Igor Melani, “Immagini della Russia tra Oriente e Occidente nel XVI secolo: politica, religione, culture nella *Moscovia* di Antonio Possevino,” Claudia Pieralli et al. eds., *Russia, Oriente slavo e Occidente europeo. Fratture e integrazioni nella storia e nella civiltà letteraria*, Firenze, 2017, pp.85-110.

⁶⁰ *Annuae litterae Societatis Iesu Anni MDLXXXIII* 【G】

⁶¹ Vincenzo Ruggieri, “Constantinopoli vista da P. Guido Mancinelli S. J. (1583-1585),” *Revue des études byzantines* 60-1. 2002, pp.113-131.

⁶² *DHCJ*, tomo 4, p.3175.

⁶³ *Annuae litterae Societatis Iesu anni MDLXXXIV* 【G】

マへの帰一の策動を記す。ここで活躍したユダヤ人イエズス会士ジャン・バッティスタ・エリアーノの名は出てこない⁶⁴。エリアーノのコプト教会へのアプローチは60年代に続いて2回目だが、今回も成功しなかった。

1585年報（1587年刊，総362頁）⁶⁵では，ポーランドが大きな存在感を有する（pp.201-250）。会員数はすでに360人に達していた。236頁以下はスウェーデンなどの「ミッション」の記述に割かれている。これまで存在していた東インドがない。

1586/87年は一書にまとめられている（1589年刊，総592頁）⁶⁶。編者フランチェスコ・ベンツィは当時ローマ・コレジオで修辞学を教授していた。前掲のインドの5人の殉教者を顕彰する詩も公刊している⁶⁷。彼は88，89年分も編集している。

二年分とあって分量もそれなりにあるが，やはりポーランドが際立つ（pp.129-201）。メキシコの中にフィリピン（pp.483-488）が含まれる。イエズス会は他の修道会（アウグスティノ会・フランシスコ・ドミニコ会）に遅れて当地に進出したが，後述するように総年報のなかで次第に存在感を高めてゆく。インドが復活し（pp.576-591），簡単ながら日本・中国に関する記述も含まれる（pp.589-591）。最初に有馬・大友の動向に言及があるのは，1585年の天正少年使節の教皇拝謁の流れであろうし，中国ではマテオ・リッチが広東省に拠点を作ったこと（1583年の出来事だが）が言及される。しかし，以後の総年報に日本や中国の話が出てくることはほとんどない。

1588年報（1590年刊）⁶⁸は総336頁中，やはりポーランドが最多（pp.76-115）である。サルデーニャが別項立てになっているが，アラゴン管区に所属している⁶⁹（pp.256-259）。インド（pp.323-336）に極東の記事はない。

1589年報（1591年刊，総473頁）⁷⁰も，ヨーロッパではポーランドの分量が最も多い

⁶⁴ エリアーノの活動については，Robert John Clines, *A Jewish Jesuit in the Eastern Mediterranean: Early Modern Conversion, Mission, and the Construction of Identity*, Cambridge, 2019を参照。

⁶⁵ *Annuae litterae Societatis Iesu anni MDLXXXV* 【G】

⁶⁶ *Litterae Societatis Iesu duorum annorum M.D.LXXXVI et M.D.LXXXVII* 【G】

⁶⁷ *DHCJ*, tomo 1, pp.405-406.「五人の殉教者」の英語訳注が Paul Gwynne, *Francesco Benci's Quinque martyres: Introduction, Translation, and Commentary*, Leiden and Brill, 2018である。

⁶⁸ *Annuae litterae Societatis Iesu anni MDLXXXVIII* 【H】

⁶⁹ 独立した管区になるのは1597年。*DHCJ*, tomo 2, p.1269.

⁷⁰ *Annuae litterae Societatis Iesu Anni MDLXXXIX* 【G】

(pp.110-147)。本巻で突出しているのはペルーである (pp.367-445)。リマ・クスコなどの各コレジオの記述に加えて、1587年にディエゴ・サマニエゴらによって開拓されたサンタ・クルス (現ボリビア) のミッション (pp.421-445) の記述が詳しい⁷¹。インドはない。

1590年と91年分は合巻である (1594年刊, 総919頁)⁷²。ヨーロッパではオーストリア (pp.227-284)⁷³, ライン (pp.334-410), リヨン (pp.490-556) が50頁を越える。メキシコ (pp.690-729)・ペルー (pp.730-769) に比してブラジルは少なく (pp.819-831), インドの分量は多いが (pp.832-918), 日本・中国への言及はない。

ここまでがローマで刊行され、2年合巻が2度あるが、まず着実に刊行されたといつてよい。しかし、以後は各地に出版を分担させる形となり、刊行速度も落ちる。

1592年報はフィレンツェで1600年に刊行されたが⁷⁴, 分量が181頁と少なく、ヨーロッパ以外はとりあげられていない。他巻のように管区内をコレジオなどの施設単位でまとめるのではなく、諸活動を項目に立てるのが異例である。93年報とともに編者は『ザビエル伝』で名高いホラティオ・トルセリーニである。同地で翌年刊行された1593年報は450頁あり⁷⁵, こちらは通常の形式である。一番多いのは、メキシコ (pp.396-450) である⁷⁶。なお、両書の出版社のフィリポ・ジウンティ (Filippo Giunti) はフィレンツェ有数の出版社一族の出で、イエズス会士ペドロ・マッフエイの『インド史』を1588年に刊行している⁷⁷。

1594/95年報の合巻は1604年にナポリで刊行された (総868頁)⁷⁸。編者はナポリで

⁷¹ Alexandre Coello de la Rosa, "Repensando el proyecto jesuítico en el Alto Perú: Diego Martínez, SJ, misionero y jesuita en Charcas colonial (1600-1606)," *Indiana* 25, 2008, pp.51-76.

⁷² *Litterae Societatis Iesu duorum annorum MDXC et MDXCI* 【G】

⁷³ ブラチスラヴァ, プルノなどの拠点も含まれる。

⁷⁴ *Annuae litterae Societatis Iesu Anni M.D. LXXXXII*, Florentiae apud Philippum Iunctam 【G】

⁷⁵ *Annuae litterae Societatis Iesu Anni MDXCIII* 【G】

⁷⁶ シナロアの記述が目立つ。ミッションを始めたゴンサロ・デ・タピアは早くも翌年に殉教する。

⁷⁷ *Ioannis Petri Maffei Bergomatis e Societate Iesu Historicum Indicarum Libri XVI Selectarum item ex India epistolarum eodem interprete Libri IV* 【L】

⁷⁸ *Litterae Societatis Iesu duorum annorum M.D.XCIII et M.D.XCV*, apud Tarquinium Longum 【G】

刊行された 96, 97 年報とともにセバスチャン・ベレタリウス⁷⁹。出版社のタルキニオ・ロンゴは長年かけて練り上げられた『イエズス会学事規定 (*Ratio atque Institutio Studiorum Societatis Iesu*)』を刊行し、96, 97 年報も出版している。オーストリア (pp.355-426)⁸⁰、高地ドイツ (pp.427-486)、メキシコ (pp.622-675)、ペルー (pp.676-761)、インド (pp. 802-868) が目立つ。メキシコではゴンサロ・デ・タピアの殉教に一項が立てられ (pp. 655-664)、ペルーでは、トゥクマン (現在のアルゼンチン北部) とパラグアイの一項の記述が詳しい (pp.724-747)。インドの末尾にエチオピアの記事があり (pp.865-868)、アントニオ・モンセラッテとペドロ・パエスがエチオピアに渡航しようとして途中で捕らえられたことを記す。

1596 年報 (総 1063 頁)⁸¹ は 1605 年に刊行された。末尾にかなり詳細なインデックスが付される。ここまではローマから始まっていたのに、ポーランドが冒頭に置かれている事情はよくわからないが、ローマなどイタリア諸管区はポルトガルとインドの間に割り込むような形で入っており、編集・出版の都合によるものだったと推測される。単年のものとしてはもっともボリュームがあり、高地ドイツ (pp.123-225) とペルー (pp.871-998) に 100 頁以上が費やされ、以下、分量順に並べると、ライン (pp.226-309)、メキシコ (pp.552-619)、フィリピン (pp.999-1063)、オーストリア (pp.65-122)、ポーランド (pp.11-64)、インド (pp.818-870) と続く。メキシコの付属扱いだったフィリピンが準管区 (1595 年成立) として独立項となる。

1597 年報 (総 610 頁)⁸² も 1607 年に刊行された。やはりインデックスがつく。イタリアが先頭に戻っているが、ローマだけ末尾にくる⁸³。サルデーニャが復活し、メキシコ (pp.414-474) とインド (pp.502-574) の記述が多く、後者にはエチオピア・モゴルの記述がある。二年前にはアクバルのもとにイエズス会士の第二次宣教団が派遣されていた。

⁷⁹ 著者はブラジルで活躍したジョゼ・アンシエタの伝記を 1617 年に公刊した。Markus Friedrich, "Constructing a Saint's Life between Rome and the Provinces: Jesuit Hagiographical Literature on Peter Canisius," *Journal of Jesuit Studies* 10, 2023, pp.419-437.

⁸⁰ やはり、モラヴィア地方のブルノの記述が詳しい。

⁸¹ *Annuae litterae Societatis Iesu anni M.D.XCVI* 【M】

⁸² *Annuae litterae Societatis Iesu anni M.DXCVII* 【G】

⁸³ インドのあとにベレンティウスの署名があり、その後にローマの記述が始まっている。

1598年⁸⁴, 99年報⁸⁵は、ともに1607年にリヨンで刊行された。いずれにも編者の署名はない。出版社のジャック・ルサン (Jacques Roussin) は、初代総長の正則の伝記であるペドロ・デ・リバデネイラの『ロヨラ伝』を1595年に刊行している⁸⁶。前者は559頁、後者は702頁で、ともにイタリアシリーズの後に、他巻では後方に置かれるポルトガルが続く。後者のうちではポルトガルの分量が最大 (pp.123-208) で、これにメキシコ (pp. 605-677) が続く。

1600年報⁸⁷はずいぶん飛んで1618年にアントワープで刊行された (総586頁)。編者の署名はない。出版社は「マルティヌス・ヌティウス」(マルティン・ヌイツ) を看板にしているが、この時の当主マルティヌス3世がまだ幼かったので、同市のヤン・ファン・マースと共同出版を行った。父の2世は各地の会士の活動を伝えるジョン・ヘイの『最近の書簡による日本・インド・ペルー事情』を1605年に刊行している⁸⁸。本書には、これから取り上げる各地の年報も収録されている。総年報に話を戻すと、ライン (pp.363-424), オーストリア (pp.425-506) そしてポーランド (pp.535-586) の分量が多い。オーストリアにはトランシルヴァニアの記事が含まれる (pp.495-506)。

1601年報 (総789頁)⁸⁹, 02年報 (総775頁)⁹⁰も同年に同出版社から刊行された。02年報の末尾には当時のベルギー管区長カルロ・スクリバーニが署名した出版許可状を載せるが、編者への言及はない。前1600年報はローマから始まっているが、01年報はシチリアから始まる。リヨンが100頁以上あり (pp.392-500), ミッションの記述がかなりを占める (pp.417-446, 465-473)。イエズス会は当時、パリからは追放されていたが、中南部での活動は続いていた。カルヴァン派 (ユグノー) との格闘を示している。高ドイツ (pp.501-561), ライン (pp.561-636), オーストリア (pp.636-706) も分量が多い。1602年報にもローマがない (総775頁)。リヨン (pp.315-384), ライン (pp.492-584), オーストリア (pp.585-676) が長大なのも前年報と同じである。ポーランドも

⁸⁴ *Annuae litterae Societatis Iesu anni M.D.XCVIII* ex Typographia Iacobi Roussin 【G】

⁸⁵ *Annuae litterae Societatis Iesu anni M.D.XCIX* 【G】

⁸⁶ *Vita Ignatii Loiolae : qui Religionem Clericorum Societatis Iesu instituit* 【G】

⁸⁷ *Annuae litterae Societatis Iesu anni MDC*, apud Heredes Martini Nutti et Ioannes Meursium 【I】

⁸⁸ *De rebus Japonicis, Indicis et Peruanis epistolae recentiores* 【G】

⁸⁹ *Litterae annuae Societatis Iesu anni M.D.CI* 【G】

⁹⁰ *Litterae annuae Societatis Iesu anni M.D.CII* 【G】

50 頁を上回る (pp.711-775) が、前年報にあるリトアニアはない。

1603-1605 年報はベルギー管区所属のドゥエーで 1618 年に刊行された。いずれにも編者の署名はない。ドゥエーはカトリックのイングランドへの反転攻勢の基地であった。出版社ローレンス・ケラムは旧約聖書の英訳を 1609-10 年に出版している⁹¹。いずれにもローマがない。03 年報⁹²は総 706 頁。オーストリア (pp.314-413), ライン (pp.481-579) はそれぞれ約 100 頁で、ポーランドも長い (pp.647-706)。04 年報⁹³ (総 758 頁) ではオーストリアが 100 頁を上回り (pp.450-557), それに次ぐのがラインである (pp.592-669)。05 年報 (総 978 頁)⁹⁴ は珍しく、ナポリ (pp.29-88), ミラノ (pp.89-156), ヴェネチア (pp.157-205) などのイタリア諸管区の分量が相当あるが、これらを圧するのがペルーで (pp.315-440), ラインも 100 頁超 (pp.650-753), オーストリア (pp.754-833), アンダルシア (pp. 245-300), ポーランド (pp.880-934) と続く。ポルトガルがない。

1606-08 年分は、やはり 1618 年にマインツで一斉に刊行されている。出版社ヨハン・アルビヌスは後に取り上げる 1598 年の日本年報も刊行している。やはりいずれも編者を記さないし、ローマがない。共通したタイトル・ページを有し⁹⁵, 3 巻本である。1606 年報 (総 791 頁) はヨーロッパではライン (pp.405-464), ベルギー (pp.618-686), ポーランド (pp.687-759) が、海外ではペルー (pp.180-234), フィリピン (pp.235-295) が多いが、なかでも飛びぬけているのがトランシルヴァニア (pp.514-617) である。当地ではイエズス会士が何度も追放されており、そのたびに復帰していたが 1606 年の追放は長期続くことになる⁹⁶。1607 年報 (総 826 頁) もライン (pp.674-734), ベルギー (pp.340-394) の分量が多いが、オーストリア (pp.735-804) がこれを上回り、フィリ

⁹¹ *The Holie Bible faithfully translated into English, out of the Authentical Latin* 【I】

⁹² *Annuae litterae Societatis Iesu anni M. DC.III*, ex Officina Viduae Laurentii Kellami et Thomae filij eius Typogr 【G】

⁹³ *Annuae litterae Societatis Iesu anni M. DC.IV* 【G】

⁹⁴ *Annuae litterae Societatis Iesu anni M. DC. V* 【G】

⁹⁵ *Litterae annuae Societatis Iesu Anni 1606. 1607. & 1608*. ex Architypographia Ioannis Albini. 1606 年 【H】, 1607 年 【I】, 1608 年 【G】

⁹⁶ Pall-Szabo Ferenc, "The re-establishment of the Jesuit school in Cluj in 1615," *Journal of Church History* 2022-1, pp.3-16.

ピンは100頁以上に達する (pp.238-339)。1608年もフィリピン (pp.137-221) が多く、これに匹敵するのがオーストリア (pp.497-584)、ポーランド (p pp.662-740)、アンダルシア (pp.819-889) である。

1609-11年報の3冊はディリンゲンで刊行された(刊行年不明)。09年報⁹⁷の序文は3巻の総序であるが、筆者の名は記されず、編者も不明。出版社は、ヨハン・マイヤーの未亡人である。マイヤーについては蝶野立彦が1580年代から盛んに日本の宣教関係の書物を出版したことを明らかにしている⁹⁸。3巻いずれにも管区とその人員数の一覧表が載っているのは、他にない特色である。いずれにもローマはない。1609年はロヨラ列福の年であり、年報の冒頭は各地での祝祭について述べる (pp.1-62)。フランスではトゥールーズ管区が加わる。前年に第四の管区として成立していた⁹⁹。イエズス会のパリ追放処分を解いたアンリ4世は今や全面的にイエズス会を支持していた。前稿で取り上げたピエール・デュ・ジャリックの著作もアンリ4世に献じられていた¹⁰⁰。最も分量が多いのはオーストリアだが (pp.260-323)、スペイン帝国領のペルー・フィリピン・メキシコで総669頁の約6分の1を占める (pp.518-626)。末尾にはさらに同年に亡くなったフィリピンのインディオ、ミゲル・アヤトゥモの伝記を載せる (627-669)¹⁰¹。彼は敬虔な信者ではあったが、その生涯に何か劇的なことがおきたわけではない。おそらく、彼を含むロボクの学生たちが当時の総長アックァヴィーヴァに書簡を送り、総長が返書を出したことが重く見られたのだろう¹⁰²。

1610年報¹⁰³は総545頁で50頁を越えるのはオーストリアだけである (pp.299-351)。

⁹⁷ *Annuae litterae Societatis Iesu, anni M. DC. IX* 【G】

⁹⁸ 「対抗宗教改革期及び三十年戦争期のドイツにおける日本宣教情報の受容と解釈 —1580年代～1630年代の《イエズス会日本書翰・年報》《天正遣欧使節記録》《慶長遣欧使節記録》の出版とその歴史的背景」『明治学院大学教養教育センター紀要 カルチャー』13-1, 2019, pp.71-89.

⁹⁹ *DHCJ*, tomo 2, p.1499.

¹⁰⁰ 拙稿「日出づる処」p.270.

¹⁰¹ Resil B. Mojares, “The Life of Miguel Ayatumo: A Sixteenth-Century Boholano,” *Philippine Studies* 41-4, 1993, pp.437-458.

¹⁰² H. de la Costa, S.J., *The Jesuits in the Philippines, 1581-1768*, Cambridge Mass., 1961, pp.312-313.

¹⁰³ *Annuae litterae Societatis Iesu, Anni CIO IDC X* 【M】

11 年報（総 864 頁）¹⁰⁴ では、やはりオーストリアが多く（pp.338-456）、他に 50 頁を越えるのはフランス（pp.80-143）、リヨン（pp.162-215）、ベルギー（pp.246-312）、ライン（pp. 504-588）、ポーランド（pp.589-642）である。

1612 年、13/14 年報はリヨンでそれぞれ 1618, 19 年に刊行された¹⁰⁵。序文の執筆者フィリベルトゥス・モネトゥスは編者でもある。フリードリヒによれば、1624/25 年報の稿本が彼に送られていた記録が残っているとのことだが¹⁰⁶、刊行は 14 年で打ち止めとなった。

12 年報¹⁰⁷（総 757 頁）は、オーストリア（pp.163-244）、ライン（pp.279-348）、フランス（pp.523-605）が多く、フランドルが加わった。この年、ベルギー管区はフラマン語圏のフランドロ・ベルガとフランス語圏のガロ・ベルガの二つに分かれた。

13/14 年報¹⁰⁸（総 789 頁）はオーストリアに始まり（pp.19-157）、ライン（pp.158-233）、高ドイツ（pp.233-287）の記述が厚い。発行地のリヨンについては当年の記述（pp.533-591）だけでなく、1606 年分（06 年報にはない）が追加されている（pp.757-789）。

しかし、このような「ご当地」ゆえの特徴はほかには見られない。途中でローマが消える理由はつまびらかにしないが、おそらく出版がローマを離れた時点で、地方がローマの記事を編集するということがはばかられたのであろう。また、後半になって編者の名がリヨン版を除くと消えるのも、これまでの編者が総長周辺にいた名のある文士たちであったのと対照的で、これもローマとの距離を感じさせる。

以上、30 数年間にわたって何とか継続してきた総年報を特に記述の分量に着目して概観してきた。もちろん、分量が多いことがその管区の重要度を示すものではないし、特に 1592 年以降の総年報は後年の編纂にかかり、速報性を失っているのもその時点での現勢を示しているとは限らない。しかし、それでも、各管区で作られた年報がそのまま収録されているわけではなく、編集の手が入っているのであれば、分量の多さは「総年報に書くべきこと」がそれなりにあったということを示していよう。途中でローマ

¹⁰⁴ *Annuae litterae Societatis Iesu, Anni CID IDC XI* 【H】

¹⁰⁵ 出版社 Claude Cayne とイエズス会の関係については不明。

¹⁰⁶ Friedrich, op. cit., p.12.

¹⁰⁷ *Annuae Litterae Societatis Iesu anni CID IDC XII*, apud Claudium Cayne typographum 【G】

¹⁰⁸ *Litterae Societatis Iesu, Annorum duorum, CID IDC XIII et CID IDC XIV* 【I】

の手を離れたこともあって、全体的な編集意図というのは窺いにくいにせよ、ここでいくつかその特徴をまとめておこう。

まず、ヨーロッパについて言えば、本拠であるローマをはじめとするイタリア、スペイン諸管区そしてポルトガルよりも、アルプス以北そして東欧に重心があることである。これは編集・出版がローマの手を離れて、フィレンツェを除けば、アルプス以北に移ったことも多少は関係していようが、それよりもむしろ宣教の前線の活動を重視し、その発展こそがイエズス会の成功を示すものと考えられたからであろう。

次に海外布教地について言えば、ポルトガルの布教保護権下にある東インド地域は16世紀の間はかなりの存在感を持っていたが、17世紀になると姿を消す。また、インドの中で日本・中国への言及は非常に少なく、ブラジルが取り上げられることもあまりない。アフリカについてはアンゴラなどが付随的にとりあげられる程度である。一方、スペインの影響下にあるメキシコ・ペルー、そしてメキシコから自立したフィリピンはかなりのウエイトを占める。いずれも、当該時期にメキシコは北西部へ、ペルーはボリビア、パラグアイ方面へ、フィリピンはマニラから各島へと活動を展開していったこと、コレジオが各地につくられていったことを反映しているとみてよいが、これらの地での活動報告が俗語で一般市場向けに発刊されることは少ない。後述するように東インドの報告に付随してメキシコの手紙が引かれることはあるし、ペルーについては管区代表のディエゴ・デ・トレスがヨーロッパに戻った1603年にローマの出版社ザネッティ（後出）が本を刊行し¹⁰⁹、フィリピンについてもやはりザネッティ社から年

¹⁰⁹ *Relatione breve del P.Diego de Torres della Compagnia di Giesù*. 副題に *Per consolatione de i Religiosi di detta Compagnia in Europa* 【Ga】とあるように、ヨーロッパの同胞にペルーでの宣教の発展をアピールし、宣教師をリクルートする手段でもあった。これは、ヨーロッパに報告に戻ったプロクラドールが宣伝活動の一環として書物を刊行したおそらく最初の例であり、約10年後に中国から戻ったニコラ・トリゴーが同様の手法で大成功を収めることになる。トレスの書は同年にクラクフでポーランド語訳 (*O Rozszerzeniu Wiary S. Chrześcijankiey Katolickiey w Ameryce na Nowym świecie, zwłaszcza w Królestwie Peru*) が刊行され、翌年にはミラノで再刊、ヴェルツブルクで独訳 (*Kurzer Bericht Was Gott, vermittelt der Societat Iesu, in den Peruanischen Ländern*) が、パリで仏訳 (*La nouvelle histoire du Perou* 【G】)、マインツでラテン語訳 (*Brevis relation historica rerum in provincia Peruana* 【G】) が出ていて、かなり普及したとみられる。なお、本書の末尾には1600年のフィリピン年報がついている。Carlos Sommervogel, *Bibliothèque de la Compagnie de Jésus*, Tome 3, Bruxelles, 1898, cc.132-133.

報が出版されてもいるが¹¹⁰、これらは単発にとどまった。つまり、盛んに出版された日本それに付随して存在感を増してゆく中国での活動が総年報ではほとんど取り上げられないのと好対照をなしているのである。このことは、逆に日本・中国がイエズス会の世界図において特殊な位置を占めていたことを示しているといえよう。

第2章 日本

日本年報については、さすがに研究の蓄積がある。年報の大体については、すでに日本イエズス会史研究の泰斗フーベルト・チースリクが早くに明らかにしている。それをまとめると以下ようになる。

①これまで個々の会士の書簡が集められてヨーロッパで刊行されることで「誤った」情報が氾濫することを恐れた巡察師アレッサンドロ・ヴァリニャーノが、布教長（この時点でまだ日本管区は成立していない）が情報をコントロールして首尾一貫した年次報告書を作成してローマに送ることを決め、1579年に自らの秘書フランシスコ・カリオンに最初に作成させた。

②通常、長崎からマカオに送るための船便は3月中旬になるので、各地の報告書（日常活動の要点をまとめたポントス）はその1,2か月前に長崎に届いている必要がある。

③地方の上長がまとめるポントスには、当地の世俗の情勢、教会の状況が記され、ヴァリニャーノの指示により、感化を与えるような事柄を盛り込むことになっていた。書簡をそのまま引用することも往々にしてあった。長崎で編集される年報もこの骨格を維持していた。

④宣教師の多くが国外追放された1614年以降は、これまで報告の単位となっていたコレジオやレジデンシアがなくなったため、活動報告というより、迫害・殉教の記録という性格を帯びる。作成地はおおむねマカオとなる。

¹¹⁰ *Lettera annua della vice. provincia delle Filippine dal Giugno del 1602. al seguente. Giugno 1603. Scritta dal P. Gio. de Ribera della Compagnia di Giesu al M.R. in Christo P.N. il P. Claudio Acquaviua Preposito Generale della medesima Compagnia* 【G】。同年、ヴェネチアからも刊行され、パリで仏訳が出ている (*Lettre annuelle de la Province de Philippines, du mois de Juin 1602, jusques au mesme mois 1603*)。

⑤郵送の不確かさから3通以上が作成され、異なる経路（マカオ - ゴア経由とマニラ - メキシコ経由）でヨーロッパに発送されたが、作成時にズレがあるので内容に違いが出てくる。

⑥マカオで書かれたものや、ラテン語に翻訳された年報の表向きの書き手は模写・翻訳者に過ぎない。

⑦感化に資するのが趣旨であるから、悪口とか会士の個人的見解、スキャンダルや内紛は載せない¹¹¹。

本稿で扱う印刷本に編集による改変、翻訳、翻刻に伴う誤りなどが多くみられることから、チースリクは原文書の重要性を示唆している。五野井隆史は、さらにこの点を強調して年報の原文書を検討する必要性を説き、その基礎作業として世界各地に現存する手書本135点（うち原本111点）を調べ上げるとともに、チースリクが取り上げたヴァリニャーノの制度的・編集上の関与の大きさ（ルイス・フロイスの年報をマカオで改変するなど）、フロイス年報の特徴¹¹²について史料を增強して述べ、年報の作成言語を明示し（原本の内訳は、ポルトガル語73、スペイン語20、イタリア語6、ラテン語12）、ポルトガル王の布教保護権下にあるポルトガル語が多いのは当然としても、スペイン語のものが多いのはマニラ・メキシコ経由が西回りよりも一年近く早くローマに着くことと、ポルトガル・スペイン両王権との合同にともない、スペイン宮廷に日本管区のプロクラドル（代表）が置かれていたことが関係しているとする。ラテン語については、1558年開催の第一総会で「感化の書」（*Litterae aedificantes*）は管区の言語とラテン語で各一通作ると規定されていたものの、実際には時間的・技術的条件がそれをゆるさず、ようやく1613年から短期間作られるにとどまったとし、送付時期については、年報作成期におけるナウ船の来航・欠航の状況を明らかにしつつ、10-11月にナウがマカオに出航するのが通常なので、それまでに作られ、翌年にずれ込

¹¹¹ フーベルト・チースリク「イエズス会年報の成立と評価」『東方学』49, 1975, pp.1-22. 「巡察師が指示しているように、迫害者の悪口はせず」（p.15）とある点は、守られているとは言いがたい。日本の秀吉をはじめとする迫害者や中国の沈淮（後述）に対する非難は悪口の域に達している。

¹¹² フロイスの書簡については、つとに岡本良知が概要を示し（“*Letters of the Society of Jesus,*” Tokyo, 1949）、その記述の特徴については、松田毅一『近世初期日本関係南蛮史料の研究』風間書房、1967、第五章「フロイス文書の内容的検討」が明らかにしている。

むことのほうがイレギュラーな事態だとする。一見すると、チースリクの主張と異なるようだが、おそらく両者は矛盾していない¹¹³。

さて、日本年報の大半はイタリア語で出版され、そこからフランス語、ドイツ語、ポーランド語、ラテン語に翻訳されている。16世紀後半になると、イエズス会による日本関係の出版物がイタリアの書籍市場でかなり大きなウエイトを占めていたことは、ソニア・ファヴィによって明らかにされている¹¹⁴。それまでは宣教師がアジア・ブラジルから書き送った書簡が雑揉したアンソロジーだったが、1578年にはじめて日本を専門とする書簡集がローマの出版社フランシスコ・ザネッティによって出版され（ポルトガル語からの翻訳）¹¹⁵、その後年報が刊行されるようになると、これが出版の中心になってゆく。

日本年報の相当数は松田毅一監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集』（以下、『日本報告集』とする）に翻訳されているが¹¹⁶、同叢書は1598年に刊行されたエヴォラ版日本書簡集（第二巻に複数の年報が収録される）や、17世紀初めに2年おきに刊行された5巻本のフェルナン・ゲレイロの布教報告集¹¹⁷（1603-1611）といったポルトガル語からの翻訳や1605年に刊行されたジョン・ヘイのラテン語版書簡集¹¹⁸からの翻訳がか

¹¹³ 五野井隆史「イエズス会日本年報について—その手書本の所在を中心として」『キリシタン研究』第18輯、吉川弘文館、1978、pp.317-378。チースリクは如上の主張の根拠を明らかにしていないが、五野井は年報作成者の一人フランシスコ・パシオが「ナウが出航するのは3月が慣例」なのでそれに合わせて作成されるように述べるものの、それまでに3月に作成された実例が1593年の事例に過ぎず、パシオがそのように考えたのはナウの越年が頻繁になっていたからだとする。しかし、五野井が次いで紹介するフランシスコ・ロドリゲスの記述も3月作成を前提としており、1605年以降はほぼ翌年2、3月に作成されている（p.363）ように、両者のとらえ方の違いは時期によるものだろう。五野井「日本イエズス会の通信について—その発送システムと印刷」『東京大学史料編纂所紀要』11、2001、pp.151-167も参照。

¹¹⁴ Sonia Favi, "Production and Circulation of Vernacular Italian Books Related to the Jesuit Mission in Japan in the Sixteenth Century," *Annali di Ca' Foscari. Serie orientale* 54, 2018, pp.365-390.

¹¹⁵ *Lettere del Giappone de gli anni 74. 75 & 76. scritte dalli Reverendi Padri della Compagnia di Giesu & di Portuguese tradotte nel volgare Italiano* 【G】

¹¹⁶ 第1期 - 第Ⅲ期計15冊、時間幅は1549年から1587年（第Ⅲ期7冊）、1588年から1607年（第Ⅰ期5冊）、1608年から1625年（第Ⅱ期3冊）で、1987年から98年にかけて同朋舎から刊行された大事業である。ただ、底本をイタリア語年報とするものはむしろ少数派である。

¹¹⁷ 本書については、拙稿「日出づる処」pp.370-373を参照。

¹¹⁸ 注88。

なりを占めている。

それでは、以下日本年報の刊行状況について概観する¹¹⁹。ほとんどすべてがローマのザネッティ社の出版に始まっており、以下の記述はローマ版を基本として、適宜他の版本・訳本に言及する。なお、サイズは八折り版（オクターヴォ）である。

1579・80年の年報（159 pp.）は1584年に¹²⁰、81年報（118 pp.）は85年に¹²¹ローマ

¹¹⁹ 書誌情報については、注114Favi論文、João Paulo Oliveira e Costa, “Japan and the Japanese in printed works in Europe in the sixteenth century,” *Bulletin of Portuguese - Japanese Studies* 14, 2007, pp. 43-107, Robert Streit, *Bibliotheca Missionum* 4. Bd. *Asiatische Missionsliteratur, 1245-1599*, 5. Bd. *Asiatische Missionsliteratur, 1600-1699*, Aachen, 1929 やラウレスキリシタン文庫、筑波大学ベッソン・コレクションのサイトなどを利用した。

¹²⁰ *Alcune lettere delle cose del Giappone scritta da' Reverendi Padri della Compagnia di Iesu. Dell'anno 1579. insino al 1581* 【L】. タイトルはまだ「年報」となっていない。79年のカリオン、80年のロレンソ・メシアの年報に加えて、81年についてはフロイスの書簡などを載せる。ミラノ（Pacifico Pontio）やブレシア（Vincenzo Sabbio）、ナポリ（Horatio Saluiani & Cesare Cesari）でも同年に刊行され、ヴェネチアではタイトルをやや変えて翌年に刊行されている。なお、（ ）内の出版社は次に掲げるヴェネチア版のGiolito一族とともに年報出版ではおなじみの顔ぶれであり（Giolito家については、Sonia Favi前掲論文 p.374を参照）、イエズス会やローマのザネッティと何らかの形で業務提携していたのであろう。*Nuove lettere delle cose del Giappone, paese del mondo novo, dell'anno 1579. insino al 1581. Con la morte d'alcuni padri della Compagnia di Giesu* 【B】. 附録としてついている「神父たちの死」とは、1583年にインドのサルセツで殉教したロドルフォ・アックァヴィーヴァら5人のことで、報告者は当時ローマに向かう天正少年使節を引き連れてインドに戻ってきていたヴェリニャーノである。次に述べるローマ刊82年報の附録とすげかえた形である。仏訳は1584年にパリで出ている。*Lettres nouvelles du Jappon touchant l'avancement de la Chrestiente en ces Pays la, de l'an 1579. jusques à l'an 1581* 【B】. カリオンとメシアの年報は1585年にディリンゲンで刊行された *Historischer Bericht was sich nechst verschine Jar 1577. 79. 80. vnd 81 in beköhrung der gewaltigen Landschafft und Insel Jappon theils in Politischen vnnnd Welllichen theils auch in Gaistlichen sachen zugetragen* にも収録されている。

¹²¹ *Lettera annale delle cose del Giappone del M.D.LXXXII* 【B】とあるように、表題は1582年だが、ガスバル・コエリヨの執筆は1582年2月15日で、内容は81年のものである。同年ミラノでも刊行された。ヴェネチアでも同年、*Lettera annale portata di novo dal Giappone da i signori ambasciatori delle cose ivi successe l'anno M.D.LXXXII* というタイトルで刊行されており、この年報をもたらしたのが少年使節であることを示している。仏訳は翌86年にパリで出ている。*Lettres du Jappon de l'an M.D.LXXXII, envoyee au R. P. General de la compagnie de Iesus* 【B】. また、同年にスイスのフリプールで出た *Wahrhaftiger Bericht von den Newerfundnen Japponischen Inseln vnd Königreichen auch von andren zuvor unbekandten Indianischen Landen. Darinn der heilig Christlich Glaub wunderbarlich zunimpt und auffwächst. Neben dem allen erfindet sich in diser Edittion gründliche anzeigung von der Japponischen Legation newlich gehn Rom ankommen: von etlichen Blützeugen deß wahren Christlichen Glaubens: von Brasilia*

で刊行されている。82年以來、年報の執筆はほぼフロイスの手になるが、それらがすべてイタリア語で刊行されたわけではない。まず、1582-84年の日本・中国情報を集めて1586年に刊行された書(188 pp.)に収録された1584年1月2日付の83年報、同年9月3日付の84年報(一部)¹²²がイタリア語で刊行された。一方、有名なエヴォラ版日本書簡集(ポルトガル語)の第二巻には1582年10月31日付の年報と信長の死を報じた11月5日付の補遺、1583年報、84年報、85年報(85年10月1日作成)が収録されている¹²³。

und weytere beschreibung der Landschafften vnd Wesen der Neuwerfundnen Völckern sampt andern seltzamen Geschichten / so in dem folgenden Inhalt deß gantzen Büchs mit kurzem gemeldet warden 【G】の中にもコエリヨ年報が含まれる(pp.1-208)。なお、本書は日本概論、辞書につづいて、コエリヨの年報(頁付けはまた1から始まる)、タイトルにも示されるブラジルの記事(pp.323-373)を含むほか、少年使節(pp.209-269)、前述の5人の神父(pp.257-284。※頁が276から257に戻り、リスタート)、大西洋上でユグノーに惨殺されたブラジル宣教団関係の記述(pp.285-322)、ブラジル1575年書簡(pp.323-393)など盛りだくさんである。編者であるスイスの学者レンヴァルト・ツイザートはこれらの情報をイタリア語から翻訳している。踊共二「白い肌のアジア人—レンヴァルト・ツイザートの『日本誌』(一五八六年)を読む」『武蔵大学人文学会雑誌』35-4, 2004, pp.103-151は、そのうち日本関係の部分を論じたものだが、タイトルを見てもわかるように、日本以外の部分が付録というわけではない。

¹²² *Avvisi del Giappone de gli anni M.D.LXXXII. LXXXIII et LXXXIV. Con alcuni altri della Cina dell' LXXXIII et LXXXIV cavati dalle lettere della Compagnia di Giesù. Ricevute il mese di Dicembre. M.D.LXXXV* 【L】, pp.128-168。ただし、記されているのは豊後と都についてであり、1584年8月31日付の下(九州)の部は収録されていない。本書は同年ミラノでも刊行されている。中国については、内地入りしてまもないミケーレ・ルッジェーリ、マテオ・リッチの書簡などが収録される。また、同年にディリンゲンで刊行された *Fernere Zeitung auss Japon / deß zwey unnd achtzigsten / drey vnd achtzigsten / vnd vier vnd achtzigsten Jars. Sampt Langstgewünschter Frölicher Bottschafft / ausz der gewaltigen / bisz anhero Haydnischen Landschafft China / desz 83. unnd 84. Jars: Von dem daselbst angehenden Christenthumb. Gezogen auß Briefen der Societet Iesu / die zu Rom ankommen / im December desz 1585 Jars* 【L】はタイトルを見ても分かる通り基本的には上記書の翻訳だが、末尾に最新のメキシコからの書簡(アントニオ・メンドサ, 1585.11.30)が付される。出版社は前出のヨハン・マイヤーである。同年、フランス語版も出ているが(*Advis du Japon des annees M.D.LXXXII. LXXXIII. et LXXXIV. Avec quelques autres de la Chine, des annees LXXXIII. LXXXIV. Recueilliz des lettres de la Compagnie de Iesus, receves au mois de Decembre M.D.LXXXV* 【B】)、フロイスの83年報を欠く。

¹²³ 86年報(86.10.17)は、1588年リスボン刊行の *Alguns capitulos tirados das cartas que vieram este anno de 1588. dos padres da Companhia de Iesu que andam nas partes da India, China, Iapão & Reino de Angola, impressos pera se poderem com mais facilidade comunicar a muitas pessoas que os pedem. Collegidos per o Padre Amador Rebello da mesma Companhia, procurador*

フロイスが伴天連追放令を報じた1587年報(119 pp.)は1590年に刊行され¹²⁴,同年にドイツ語¹²⁵・フランス語に翻訳刊行された。後者はアントワープの有名な出版業者プランタンから出ている¹²⁶。当時の日本の布教責任者だったコエリヨが書いた1588年報(89年2月24日作成)は1591年にローマで刊行された中国と日本からの書簡集(214 pp.)に収録された¹²⁷。これまで挙げてきた書はすべてフランチェスコ・ザネッティが出版したものだったが、本書はその子ルイージの手になる。ザネッティ一族はイエズス会関係の出版を広く手掛けていたが、ルイージはイエズス会とのつながりをより強固

geral das provincias da India, & Brasil 【L】に収録される。79～85年の年報は、『日本報告集』ではエヴォラ版書簡集を底本とした東光博英訳を収録する(第Ⅲ期第5・6巻)。

¹²⁴ *Lettera annale del Giappone scritta al Padre Generale della G(ママ)ompagnia di Giesu alli xx. di Febraio M.D.LXXXVIII* 【L】。タイトルに総長宛てと示されたのはこれが最初である。同年、ミラノやプレシアでも刊行された。『日本報告集』第Ⅲ期第7巻に収録されるのは、有水博によるエヴォラ版書簡集の翻訳である。

¹²⁵ *Jahrbrieff auss der gewaltigen unnd weilberhümbten Insel unnd Landschafft Japon / an den Ehrwürdigen Herrn General / der Societet Iesu / den 20. Febr. Anno 88. geschriben. Darinnen vil gründliche / denckwürdige Historien vnnd Zeitungen / sonderlich der unversehenlichen geschwinden veränderung / jetziger Zeit Obersten Haupts gantz Iaponiae, Quabacundono; Auch der grossen / verwunderlich und lobwürdigen standhafftigkeit der newen angehenden / und allbereyt getaufften / Christen. Zu trost vnd mehrer aufferbawung den Guthertzigen / in eyl / ausz Italianischen in unser Hochteutsche Sprach / gebracht* 【L】

¹²⁶ *Annales indiques, contenant la vraye narration et advis de ce qu'est advenu & succédé en Japon, & aultres lieux voisins des Indes, enuoyez par les Peres de la Societé de Iesus au R.P. Claude Aquaviva General de la dicte Compagnie, en l'an 1588. Nouvellement traduites en François* 【L】。本書はルッジェーリの1586.11.8肇慶発書簡の抜粋も収録する(pp.157-165)。プランタンは1588年にローマで刊行された *Avvisi della Cina et Giappone del fine dell'anno 1586 con l'arrivo delli Signori Giaponesi nell'India. Cavati dalle lettere della Compagnia di Giesu. Ricevute il mese d'Ottobre 1588* (京都大学貴重資料デジタルアーカイブ)を同年に再刊し、中国への関心を示していた。

¹²⁷ *Lettere del Giappone et della Cina de gl'anni M.D.LXXXIX & M.D.XC. Scritte al R.P. Generale della Compagnia di Giesu* 【L】。本書は翌年ミラノ・ヴェネチア・プレシア【B】でも刊行された。『日本書簡集』第Ⅰ期第1巻はエヴォラ書簡集を底本とした日埜博司訳を載せる。仏訳はパリで出た(*Sommaire des lettres du Japon et de la Chine, de l'an M. D. LXXXIX. & M. D. XC. Escrites au R.P. General de la Compagnie de Iesus, & traduites d'Italien en François selon la copie imprimée à Rome* 【B】)ほか、ドゥエーでも同タイトルで刊行され【B】。教皇グレゴリウス13世が1572年に大学を創設し、イエズス会に運営をゆだねたボンタ・ムッソンでは別タイトルで出ている。*Lettres et advis du Japon, de la Chine, et d'autres endroits des Indes Orientales de l'an 1589 et 1590*。当地はドイツに近く、対プロテスタント前線に位置していた。

なものとした¹²⁸。

コエリヨの手になる 1589 年報（89 年 10 月 7 日作成）とフロイスの 1590 年報（90 年 10 月 12 日作成）はまとめて 93 年にローマで刊行された（125 pp.）¹²⁹。スペイン語からイタリア語に翻訳したのはイエズス会士ガスパロ・スピティッリである¹³⁰。彼は前年に出した日本・中国・インド・メキシコ・ペルー情報をミックスした書の翻訳者でもある¹³¹。

フロイス執筆の 1591/92 年報（1592 年 10 月 1 日作成）は、1595 年にやはりスペイン語からイタリア語に翻訳されて出版されている（184 pp.）¹³²。記者ウバルディーノ・

¹²⁸ 木崎孝嘉「スペインにおける天正遣欧使節パンフレット出版背景—フェリペ 2 世の「歓迎」とイエズス会の思惑—」『日本スペイン外交樹立 150 周年記念シンポジウム論集「変わりゆく世界におけるスペインと日本』京都外国語大学, 2019, p.222.

¹²⁹ *Copia di due lettere annue scritte dal Giappone del 1589. & 1590. L'una dal P. Viceprovinciale al P. Alessandro Valignano, l'altra dal P. Luigi Frois al P. Generale della Compagnia di Giesu. Et dalla Spagnuola nella Italiana lingua tradotte dal P. Gasparo Spitilli della Compagnia medesima* 【M】. 同年にミラノやプレシアでも刊行されている。『日本書簡集』第 I 期第 1 巻はミラノ版を底本とした清瀬卓訳を載せる。仏訳も同年パリで刊行された。 *Lettres annuelles écrites du Japon l'an M.D.LXXXIX & M.D.XC du P. Viceprovincial au P. Alexandre Valignan, & du P. Loys Froes au P. General de la Compagnie de Jesus* 【B】

¹³⁰ 1584 年に入会、主にローマで活動し、アーキヴィスト、総長秘書を務めた。次注書のほかにフロイスやバシオの年報（後出）やムガル・ミッション報告を翻訳している。Sommervogel, *op.cit.*, tome 7, 1896, c.1454.

¹³¹ *Ragguaglio d'alcune missioni dell'Indie Orientali, & Occidentali. Cavato de alcuni avvisi scritti gli anni 1590 & 1591. Da i P.P. Pietro Martinez Provinciale dell'India Orientale, Giovanni d'Atienza Provinciale del Perù, Pietro Diaz Provinciale del Messico. Al Rever. P. Generale della Compagnia di Giesu, & raccolto dal Padre Gasparo Spitilli della medesima Compagnia* 【L】

¹³² *Lettera del Giappone de gli anni 1591 et 1592 scritta al R.P. Generale della Compagnia di Giesu. Et dalla Spagnuola nella Italiana lingua tradotta dal P. Ubaldino Bartolini della Compagnia medesima* 【L】. 同年にミラノ、ヴェネチア・マントヴァでも刊行された。仏訳はドゥエーで刊行されている。 *Lettre du Japon des années 1591 et 1592. Ecrites au R.P. General de la Compagnie de Jesus. Et tournée d'Espagnol en Italien par le P. Ubaldino Bartolini de la mesme Compagnie: & maintenant en nostre langue vulgaire sur l'exemplaire imprimé à Rome par Louys Zanetti 1595* 【W】. タイトルにザネッティ版の翻訳であることを明示している。翌年にはラテン語版がケルンで刊行された。 *Literae annuae Iaponenses anni 1591 et 1592. Quibus res memoratu dignae, quae novis Christianis ibidem toto biennio acciderunt, recensentur. A. P. Ludovico Frois ad reverendum Patrem Generalem Societatis Iesu conscriptae; nunc vero ex lingua Italica in Latinam à quodam eiusdem Societatis traductae* 【L】. ジョン・ヘイの書簡集にも収録され、『日本報告集』第 I 期第 1 巻に載る家入敏光訳はその翻訳である。

バルトリーニは総長アックァヴィーヴァの秘書を務めた人物である¹³³。日本布教の指揮を執るヴァリニャーノと総長の間には密に連絡があったから、彼もふだんから日本情報に接していたであろう。

ペドロ・ゴメス執筆の1593年報（1594年3月25日作成）は、1597年に刊行された（141 pp.）¹³⁴。訳者バツティスタ・ベルスキは同年に刊行されたニエッキ・オルガンティーノ書簡の翻訳¹³⁵だけでなく、ムガル宮廷への3次の使節団（1582, 91, 95）の記録をまとめてイタリア語に訳し、やはりルイーダ・ザネッティのところから1597年に出版している¹³⁶。本書のタイトル（delli buoni segni, & congettture della sua conversion）を見てもわかるように、現場の宣教師はともかくとして、ヨーロッパではムガル皇帝アクバルの改宗が期待されていた。

フロイス執筆の1595年報（95年10月20日作成）は1598年（62 pp.）に¹³⁷、1596年

¹³³ Sommervogel, *op.cit.*, tome 1, 1890, c.986.

¹³⁴ *Lettera annua del Giappone dal Marzo del M.D.XCIII. sino al Marzo del XCIV. al molto R. in Christo P.N. il P. Claudio Acquaviva Preposito Generale della Compagnia di Giesu. Tradotta dal P. Gio. Battista Peruschi Romano, delle medesima Compagnia* 【L】。ミラノでも刊行された。本文末尾に「ポルトガル語から忠実に翻訳された」と記されている。なお、本書は『日本報告集』に収録されていない。第I期第2巻の凡例に、本巻はジョン・ヘイの書簡集の翻訳であるが、同書に1593, 1594年報が収録されていないと述べ、後日補遺として年報から採録する予定であると予告しているが、実現しなかった。

¹³⁵ *Copia di due lettere scritte dal P. Organtino Bresciano della Compagnia di Giesu dal Meaco del Giappone. al molto R. in Christo P.N. il P. Claudio Acquaviva Preposito Generale tradotte dal P. Gio. Battista Peruschi Romano della medesima Compagnia* 【L】。1594年9月29日付と1595年2月14日付でいずれも都（京都）発信である。末尾の総長のコメント「この年報と会士宛てのその他の数書簡がポルトガル語やスペイン語から正確にイタリア語に翻訳されたことが私に伝えられた」の「会士宛て書簡」が何を指すのかわからない。仏訳が同年アントワープで刊行された。*Copie de deux lettres du P. Organtino Bresciano de la Compagnie de Jesus, escrites en la ville de Meaco, es isles et royaumes de Japon. A nostre tres-reverend Pere en Jesus-Christ, le P. Claude Aquaviva, General d'icelle compagnie.*

¹³⁶ *Informatione del Regno, et Stato del Gran Re di Mogor, Della sua persona, qualità, & delli buoni segni, & congettture della sua conversion alla nostra santa fede. Cavata dalla relatione & da molti particolari havuti di là l'anno del 1582, & del 91, & 95* 【I】。同書は同年にプレシアやヴェローナでも刊行されたほか、仏訳が同年ブザンソン、翌年にパリで刊行され、ドイツ語訳がマインツで刊行され、ヘイの書簡集にも収められた。Sommervogel, *op.cit.*, tome 6, 1895, cc.582-583.

¹³⁷ *Copia d'una lettera annua scritta dal Giappone nel M.D.XCV. Al R.P. Claudio Acquaviva Generale della Compagnia di Giesu et dalla Portoghesea nella lingua Italiana tradotta dal P. Gasparo Spitilli di Campli, della Compagnia medesima* 【B】。同年、ナポリでも刊行された。マ

報(96年12月13日作成)は1599年(269 pp.)に刊行されている¹³⁸。いわゆる26聖人の殉教が起きた1597年については正式な年報は作られず、フロイスによる殉教記録(同年3月15日付)が1599年に刊行されている(110 pp.)¹³⁹。

秀吉の死を報じた1598年報(98年10月3日作成)はフランチェスコ・パシオによって書かれ、1601年に刊行された(109 pp.)¹⁴⁰。タイトルには現れていないが、総長の出版許可状に「日本・シナ・モゴルの情報」とあるように中国の広東韶州で活動してい

インツで出たドイツ語訳 *Zwey neue Jahrschreiben auss Japonia. Eines / was fruchtbars in diesem 1595. Jahr / im Weinberg desz Herren auszgericht. Das ander / vom schrecklichen ableiben Quabacondoni vnd seines Anhangs. Durch Ludouicum Frois / der Societet Jesu daselbst Priester. An jetzo ausz der Italianischen / in unser hochteutsche Sprach ubersetzt* 【B】はさらに同年同月の関白秀吉の死を報じたフロイス書簡を収録するが、これは同年別に刊行された *Ragguaglio della morte di Quabacondono, scritta dal P. Luigi Frois della Compagnia di Giesù, dal Giappone nel mese d'Ottobre del 1595. Et dalla Portoghesea nella lingua Italiana tradotta dal P. Gasparo Spitilli di Campli* 【L】を合本したものであり、マインツでは同年にラテン語訳 *Nova relatio historica de statu rei christianae in Iaponia, et de Quabacundoni, hos est, monarchae Iaponici trucidatione, binis Epistolis A R.P. Aloysio Frois Societatis Iesu, anno M.D.XCV, datis, comprehensa nunc ex Italico idiomate in Latinum traducta* 【L】が出ている。

¹³⁸ *Lettera annua del Giappone dell'anno M.D.XCVI. Scritta dal P. Luigi Frois, al R.P. Claudio Acquaviva Generale della Compagnia di Giesù. Tradotta in Italiano dal P. Francesco Mercati Romano della stessa Compagnia* 【L】。パドヴァ・ヴェネチア・ミラノでも刊行されている。94/95, 96年報ともに『日本書簡集』第1期第2巻ではジョン・ヘイの書簡集から採録している。

¹³⁹ *Relatione della gloriosa morte di XXVI. posti in croce : per comandamento del Re di Giappone, alli 5. di Febraio 1597. de quali sei furno Religiosi di S. Francesco, tre della Compagnia di Giesù, & dicesette Christiani Giapponesi* 【B】。ボローニャ【B】・ミラノ【B】でも同年に刊行され、マインツでラテン語版が出ている。 *De rebus Iaponicis historica relatio, eaque triplex* 【B】

¹⁴⁰ *Copia d'una breve relatione della Christianità di Giappone, del mese di Marzo del M.D. XCVIII. insino ad Ottob. del medesimo anno, et della morte di Taicosama Signore di detto Regno. Scritta del P. Francesco Pasio, al M. R. P. Claudio Acquaviva Generale della Compagnia di Giesù. Et dalla Portoghese tradotta nella lingua Italiana dal P. Gasparo Spitilli, di Campli della Compagnia medesima* 【B】。同年、プレシアやヴェネチア【B】でも刊行され、マインツで刊行されたラテン語版はタイトルが *Recentissima de amplissimo regno Chinæ Item de statu rei Christianae apud magnum regem Mogor. Et de morte Taicosamae Iaponiorum monarchae* 【B】となっており、ロンゴバルド書簡を先頭に置き、日本書簡を後ろにおく。一方、リエージュで刊行されたラテン語版・フランス語版はイタリア語版の順番どおりである。 *Iaponica, Sinensia, Mogorana., Hoc est, De rebus apud eas gentes a patribus Societatis Iesu, ann. 1598. & 99. Gestis* 【B】。 *Les Annales du Japon, de la Chine et du Mogor. C'est-à-dire les choses faictes en ces nations par les Peres de la Société de Jesus, l'an 1598 et 1599.* ジョン・ヘイの書簡集にも収録され、『日本報告集』第1期第3巻に収録されるのはその翻訳である。

たニコロ・ロンゴバルドの長文書簡や、ムガル宮廷にいたヘロニモ・ザビエル、マヌエル・ピネイロの書簡を含む。タイトルにそれが出てこないのは、年報読者にはおなじみの「太閤様」の死を前面に押し出すためかもしれない。

1599年報(99年10月10日作成)は1600年報の補遺(1601年2月25日作成)とともに1603年に刊行された(102 pp.)¹⁴¹。ドイツ語版のタイトルに「太閤様以後」とあるように、関ヶ原の前後の状況を収録する結果となっている。

フランチェスコ・パシオ執筆の1601年報(1601年9月30日作成)は1603年に刊行され(77 pp.)¹⁴²、ガブリエル・デ・マトス書いた1602年報(1603年3月1日作成)は1605年に(143 pp.)¹⁴³、モルッカ、アンボイナ、そしてマカオ・コレジオからの書簡を付して刊行された。

¹⁴¹ *Lettera del P. Alessandro Valignano. Visitatore della Compagnia di Giesù nel Giappone e nella Cina de' 10. d'Ottobre del 1599. al R. P. Claudio Aquaviva Generale della medesima Compagnia* 【G】。次の1601年報でパシオが「1601年2月に年報と補遺から日本の苦境はおわかりいただけただろう」と述べているのを見れば、年報と補遺が同時に送られたことがわかるが、年報自体は現存していない。同年ミラノ【B】・ヴェネチアでも刊行され、マインツでもドイツ語版が刊行された。*Zwey japponische Sendtschreiben Eins / des E. P. Alexandri Valignani der Societet Iesu in Iappon vnnd Cina Visitors, den 10. Octobris 1599. Das ander / P. Valentini Carvaglii Priesters: den 25. Februarij 1601. An den Ehrw. P. Claudium Aquaviva, ermelter Societet Generalem. Darinn / was wunderbarlichs / nach Taicosamae des gantzen Jappons Oberherrens ableiben / so wol nt der newen Christenheit / vnnd der Societet Iesu; als mit unversehenen enderungen in zeitlichen Regimenten sich zugetragen / beschrieben wirdt* 【B】。いずれも、ジョン・ヘイの書簡集に収録されている(『日本報告集』第I期第3巻)。パリで刊行された *Nouveaux advis du royaume de la Chine, du Japon et de l'Etat du roy de Mogor, successeur du grand Tamburlan & d'autres Royaumes des Indes à luy subjects. Tirez de plusieurs lettres, memoires & Advis envoyez à Rome* 【Ga】はヴァリニャーノとカルヴァーリオの書簡に、既出のロンゴバルドやムガル書簡を組み合わせたものである。

¹⁴² *Lettera annua di Giappone scritta nel 1601* 【L】。同年、ヴェネチアで刊行された【B】ほか、翌年マインツからラテン語版が刊行されている。*Litterae annuae Iaponicae a Reverendo P. Francisco Pasio Vice-Provinciali, ad admodum R. P. N. Claudium Aquavivam Societatis Iesu Praepositum generalem anno Domini M. DCI, datae. Romae primum anno M. DCIII apud Ludovicum Zanettum Italico idiomate* 【L】。『日本書簡集』の翻訳底本はやはりジョン・ヘイの書簡集である。

¹⁴³ *Lettere annua di giappone del M.DC.III* 【B】。表題は1603年となっているが、執筆の日付を見ればわかるように、主な内容は前年のものである。翌年ミラノで再刊され、ドゥエーで仏訳が出ている。*Lettre annuelle du Japon de l'an mil six cens et trois* 【G】。『日本書簡集』は1602年以降1607年まではゲレイロを翻訳している。

マテウス・コウロスの1603年報(1603.10.6)、ジョアン・ロドリゲス・ジランの04(1604.11.23)・05年報(1606.3.10)は08年にまとめて刊行された(318 pp.)¹⁴⁴。ここからはルイージに代わってバルトロメオ・ザネッティの出版となる。ロドリゲス・ジランは以後11年までの年報を書いた。なお、1604年報については、原本の校訂版が公刊されているが¹⁴⁵、両者を比べると繁簡の差がかなりある。先にフロイス年報にヴァリニャーノが手を加えたことに言及したが、それはフロイスの記述が冗長だということばかりでなく、出版の過程でほぼ必然的に起きることであった。1605年報には、八代で入牢していた信者たちの書簡複数件(pp.216-235)が収録され、山口で殉教したダミアン(pp.268-274)、熊谷豊前(pp.275-289)といった個人信者に立項しているのが特徴的である。

1606年報は1610年に刊行されているが(88 pp.)¹⁴⁶、1607・08年の年報の刊行は確認されていない¹⁴⁷。なお、06年の年報は中国のリッチの年報と組み合わせられて翌11年にパリでフランス語訳¹⁴⁸、アントワープでラテン語訳¹⁴⁹、ポーランド語訳¹⁵⁰が刊行されている

¹⁴⁴ *Tre lettere annue del Giappone de gli anni 1603. 1604. 1605. e parte del 1606. Mandate dal P. Francesco Pasio V. Provinciale di quelle parti al M.R.P. Claudio Acquaviva Generale della Compagnia di Giesù* 【B】. 翌年、ポローニャ、ミラノ【B】で刊行され、仏訳はリヨンとトゥエー【B】で出ている。 *Lettres annales du Japon. Envoyées par le R. P. François Pasio Vice Provincial de ces quartiers là. Au R. P. Claude Aquaviva, General de la Compagnie de Jesus. Nouvellement traduites d'Italien en François, par les Peres de la mesme Compagnie.*

¹⁴⁵ António Baião ed., *Carta Anua da Vice-Província do Japão do ano de 1604 Pe. João Rodrigues Giram*, Coimbra, 1933.

¹⁴⁶ *Lettera di Giappone dell'anno M. DC. VI. del P. Giovanni Rodriguez della Compagnia di Giesu. Al molto R. P. Claudio Acquaviva Generale della medesima Religione* 【B】

¹⁴⁷ ロドリゲス・ジランの執筆の日付は、1607年(1608.2.25)、1608年(1609.3.14)であり、着実にローマに届いてはいる(ARSI Jap.Sin.56)。

¹⁴⁸ *Lettres annales des royaumes du Japon, et de la Chine, des années 1606. & 1607. Escrites par les Pères Jean Rodriguez, & Matthieu Ricci, de la Compagnie de Jésus. Au R. P. Claude Aquaviva leur Général. Traduites de l'Italien (imprime a Rome l'an 1610) par un Père de la mesme Compagnie* 【Ga】

¹⁴⁹ *Litterae Iaponicae anni M. DC. VI. Chinenses anni M. DC. VI. & M. DC. VII. Illae à R. P. Ioanne Rodriguez, hae à R. P. Matthaeo Ricci, Societatis Iesu Sacerdotibus, transmissae ad admodum R. P. Claudium Aquavivam eiusdem Societatis Praepositum Generalem, Latine redditae à Rhetoribus Collegii Soc. Iesu Antverpie* 【B】. 浦川和三郎「一六〇六年(慶長十一年)度耶蘇会年報」『キリシタン研究』第3輯, 吉川弘文館, 1948, pp.1-70はその翻訳。

¹⁵⁰ *Nowiny albo dzieje dwuletnie z Japonii y z Chiny, kraim pogańskich nowego świata, to jest: listy X. Jana Rodriquesa y X. Mattheusza Riccego S. J., R. P. 1606 y 1607 do Przewielebnego. X.*

るが、バルトロメオが別に出版した中国年報¹⁵¹と合綴したものである。

バルトロメオは1611年には1608年フィリピン管区年報¹⁵²、日本の殉教者の報告¹⁵³を出してから宣教関係の出版を小休止したが、1615年になって一気に1609（1610年3月15日作成）・10年（1611年3月13日作成）の年報は1冊にまとめて（147 pp.）¹⁵⁴、11年報（1612年3月10日作成）¹⁵⁵・12年報（1613年1月12日作成）¹⁵⁶はそれぞれ単独で刊行した（120 pp., 168 pp.）。

セバスチャン・ヴィエイラ執筆の1613年報（1614年3月16日作成）は、1617年に

Claudiusza Aquawiva, tegoż zakonu generała, pisane, a teraz z włoskiego na polskie przez X. Symona Wysockiego tegoż wezwania przetłumaczone

¹⁵¹ *Annua della Cina del M.DC.VI. e M.Dc.VII.* ミラノ版が【G】で閲覧可能。

¹⁵² *Lettera annua della Provincia delle Filippine dell' anno M.DC.VIII*

¹⁵³ *Relationi della gloriosa morte di nove Christiani giaponesi* 【B】

¹⁵⁴ *Lettera annua del Giappone del 1609. e 1610. Scritta al M. R. P. Claudio Acquaviva Generale della Compagnia di Giesù. Dal P. Giovan Rodriguez Girano* 【B】。同年にミラノでも刊行され【B】。リールで仏訳 *Lettres annuelles du Jappon pour les années M. DC. IX. et M. DC. X. Envoyees au R. P. Claude d'Aquaviva, Général de la Compagnie de Jésus*, アントワープでラテン語訳 *Litterae Iaponicae annorum M. DC. IX. et X. Ad R. admodum piae mem. P. Claudium Aquavivam Generalem Praepositum Societatis Iesu a. R. P. Provinciali eiusdem in Iapone Societ. missae. Ex Italicis Latinae factae ab And. Schotto* 【B】が出た。『日本報告集』はミラノ版を底本とした鳥居正雄訳を収録する（第Ⅱ期第1巻）。

¹⁵⁵ *Lettera annua del Giappone del M.DC.XI. Al molto Reveren. Padre Claudio Acquaviva, Generale della Compagnia di Giesu. Scritta dal P. Giovanni Roderico Giram, della medesima Compagnia di Giesu* 【G】

¹⁵⁶ *Lettera annua del Giappone del M. DC. XII. Al molto Reveren. Padre Claudio Acquaviva, Generale della Compagnia di Giesù. Scritta dal P. Giovanni Roderico Giram, della medesima Compagnia di Giesu* 【L】。『日本報告集』は、11、12年報のいずれもローマ版を底本とした相原寛彰訳を収録する（第Ⅱ期第1巻）。チースリクの前掲論文 p.21 や尾原悟『キリシタン文庫 イエズ会日本関係文書』南窓社、1981、p.244 はコウロスの作とするが、本書には「副管区長（コウロス）の委嘱によりロドリゲス・ジランが書いた」とある。年報の終わりに「多くの者が翌年の迫害のことについて知りたがっているので」マトスが管区長のために総長宛てに書いた手紙（1613.2.27）と日本司教セルケイラ書簡（10.26）を引用すると述べる（p.162）。より新しい迫害のニュースが読者に求められていたことを示している。翌年に出たミラノ版の表題は11年報となっているが、実際には12年報との合綴である。また、当時リッチ死後の中国布教の状況を伝えるにヨーロッパに戻ってきていたニコラ・トリゴーは1615年にアウクスブルクでリッチの記録をラテン語に訳編したものを刊行したが、同年同所で *Rei Christianae apud Iaponios commentarius ex litteris annuis Societatis Iesu annorum 1609. 1610. 1611. 1612. collectus. Auctore P. Nicolao Trigautio eiusdem Societatis* 【G】も刊行している。本書は表題が示すように、4年間の年報を全20章にまとめ、各章の中に各年の記事を並べたものである。

刊行された(72 pp.)¹⁵⁷。本書はのちに『日本教会史』(1627)¹⁵⁸を著すことになるフランソワ・ソリエによる仏訳が、パリ・ボルドー・リヨン・ポント＝ムッソンで刊行された。

1614年報(14年10月25日作成)はこの年にそれぞれ西回り、東回りでローマに向かったマトスとモレホンの年報の2種類が刊行された¹⁵⁹。しかし、チースリクが指摘するように、二書はタイトル名が若干異なるだけで、体裁も中身も全く同じである(205 pp.)。

1615年報(1616年3月15日作成)・1616年報(1617年2月22日作成)は日本に残留していたコウロスが執筆したが、そのラテン語による縮約が収録されたのは、1621年に刊行された、日本以外の宣教記録も集めた書物であった(404 pp.+正誤表)¹⁶⁰。訳編者はマカオにいたジョヴァンニ・ウレマン¹⁶¹である。本年報には大坂の陣後の教会の窮境がつづられている。

ロドリゲス・ジランの1617年報(1618年12月20日作成)は刊行されず、マカオで作成されたカミロ・コスタンツォの1618年報(1618年12月18日作成)は上記の21年刊行書に収録された¹⁶²。コスタンツォはウレマンと異なり、日本経験を有し、1614

¹⁵⁷ *Lettera annua del Giappone dell'anno M.DC.XIII. Nella quale si raccontano molte cose d'edificatione, e martirij occorsi nella persecutione di questo Anno. Scritta dal P. Sebastiano Vieira della Compagnia di Giesu. Al molto R. P. Generale dell'istessa Compagnia* 【B】. 『日本報告集』第Ⅱ期第3巻に14年報とともに小林満の翻訳が収録されている。

¹⁵⁸ *Histoire ecclesiastique des Iles et royaume du Iappon*

¹⁵⁹ *Lettera annua del Giappone del M. DCXIV. Al molto Reverendo Padre Generale della Compagnia di Giesu. Scritta dal Padre Gabriel de Mattos della medesima Compagnia di Giesu* 【B】. *Lettera annua del Giappone del M. DCXIV. Al molto Reverendo Padre Mutio Vitelleschi Generale della Compagnia di Giesu. Scritta dal Padre Pietro Morecion della medesima Compagnia di Giesu*. 後者はSkilled Booksのリプリント版を使用。

¹⁶⁰ *Lettere annue del Giappone China, Goa, et Ethiopia. Scritte al M. R. P. Generale della Compagnia di Giesu. Da Padri dell'istessa Compagnia ne gli anni 1615. 1616. 1617. 1618. 1619. Volgarizzati dal P. Lorenzo delle Pozze della medesima Compagnia* 【G】. 同年にミラノでも刊行された。この年報をコウロスが作成した過程を検討したのが、Josef F. Schütte「一六一四・一五年、大坂の陣と日本の教会——一六一六年三月十五日付日本年報とその他のイエズス会の資料によって——」『キリシタン研究』第17輯、吉川弘文館、1977、pp.3-51である。

¹⁶¹ トリゴーとともに東方に向かい、この年マカオに到着したばかりであったが、翻訳編集であれば現地事情を知っている必要もない。*Louis Pfister, Notices biographiques et bibliographiques sur les jesuites de l'ancienne mission de Chine 1552-1773*, rep. San Francisco, 1976, pp.149-150.

¹⁶² 1615・16年報とともに、『日本報告集』第Ⅱ期第2巻に、ミラノ版を底本とした鳥居正雄訳が

年にマカオに追放されていたが、本書が刊行された年に日本に戻り、翌年殉教した¹⁶³。
 前述したように、デッラ・ヴァッレはその殉教をゴアで耳にしたのである。

ガスパル・ルイスの1619年報（ラテン語¹⁶⁴で1620年1月10日作成）、ジョヴァンニ・バットィスタ・ボネッリの20年報（ラテン語で1621年11月20日作成）、ジローラモ・マヨリカの21年報（ラテン語で1622年10月6日作成）は24年にまとめて刊行された¹⁶⁵（150 pp.）。同書の刊行者はバルトロメオの「相続者」である。末尾にはジローラモ・デ・アンジェリスのエゾ報告が収録されている。これは西洋人が北海道を実地に歩いた者として残した最初の記録で相当な影響力を持った¹⁶⁶。

ロドリゲスの年報を訳したルイス、そしてマヨリカ¹⁶⁷、ボネッリはいずれも日本渡航経験はなく、マカオに来て間もなかった。刊本では彼らの名前が表に出ているが、実

収録されている。

¹⁶³ DHCJ, tomo 2, 2001, p.981.

¹⁶⁴ 彼は前出の21年刊本では1618・19年ゴア年報の執筆者として名が見え、後者の日付が1620年2月3日となっており、その時点でゴアにいたとすると、マカオでの執筆時期が同年1月10日とあることと矛盾する。当時、マカオとゴアの間を1か月で旅することは無理だった。

¹⁶⁵ *Relazione di alcune cose cavate dalle lettere scritte ne gli anni 1619. 1620. & 1621. dal Giappone. Al molto Reverendo in Christo P. Mutio Vitelleschi Preposito Generale della Compagnia di Giesù* 【B】. 同年にミラノで、翌年トリノで刊行されたほか、1624年にパリで仏訳、25年にアントワープでラテン語版が出ている。*Histoire de ce qui s'est passé au Japon. Tirée des lettres écrites és années 1619. 1620. & 1621. Adressées au R. P. Mutio Vitelleschi General de la Compagnie de Jesus. Traduite de l'Italien en François par le P. Pierre Morin de la mesme Compagnie* 【B】. *Rerum memorabilium in Regno Iaponiae gestarum Litterae an. M.DC.XIX. XX. XXI. XXII. Societatis Iesu. Ad Rev. admodum in Christo Patrem P. Mutium Vitelleschi Praepositum Generalem eiusdem Societatis* 【M】. 浦川和二郎『元和五・六年度の耶蘇会年報』東洋堂、1944はそのうちの1619、20年報の訳である。『日本報告集』は19～21年報と後述の殉教情報を家入敏光の翻訳で収録する。表題に1622年とあるのは、その年の殉教情報を加えたからである。これと同じものがイタリア語でも1624年にミラノで出ている。*Breve relatione de gli atroci, et rigorosi martirii, Che anno 1622. dettero nel Giappone a cento, et dieiottio illustriss. martiri, tratta principalmente dalle lettere delli Padri della Compagnia di Giesù, i quali ivi erano residenti, & da cio che e stato riferito da molte persone di quel Regno, le quali in due nauì arriuorno alla Citta di Manila a 12. d'Agosto 1623* 【B】. 表題にあるとおり、マニラ経由の情報である。一方、蝦夷情報は落ちている。なお、ボネッリの報告日付が刊本で1620年12月21日となっているのは誤りだろう。

¹⁶⁶ Joseph F. Schütte, “A Map of Japan by father Girolamo de Angelis,” *Imago Mundi* 9-1, 1952, pp.53-58.

¹⁶⁷ DHCJ, tomo 3, p.2588. tomo 1, p.486.

際にはすべてロドリゲス・ジランが執筆したものを編訳したのである¹⁶⁸。1622年報もマヨリカがラテン語で1623年9月30日に作成したものの翻訳が1627年刊行の中国年報との合綴本(312 pp.)に収録されているが¹⁶⁹、もとになっているのはやはりロドリゲス・ジランの年報である。本書の刊行者はフランチェスコ・コルベレッティである¹⁷⁰。

1623年報は原本の存在も知られていない。1624年報(1625年3月28日作成)は1628年に単独で(160 pp.)¹⁷¹、1625年報(1626年3月15日作成)・26年報(1627年3月31日作成)はロドリゲス・ジランが作成したものが1631年にコルベレッティによって刊行された(326頁)¹⁷²。

『日本報告集』は1624年、25年報は抄訳し、26年報はカットしている。「歴史学の資料としては欠陥が多く」、以後は殉教録の色彩が強いというのがその理由だが¹⁷³、年報であるには違いないので、その内容を概観しておく。

主題は「24人(うちイエズス会士9人、他は俗人)が死んだことについてはすでに

¹⁶⁸ 尾原前掲書、pp.256-259によれば、ロドリゲスのポルトガル語年報と記載項目がほぼ一致する。

¹⁶⁹ *Lettere annue del Giappone dell'Anno MDCXXII. e della Cina del 1621. & 1622* 【G】。仏訳がパリで、ラテン語訳がウェストファリアで刊行されている。*Histoire de ce qui s'est passé es Royaumes du Japon, et de la Chine* 【B】。*De novis Christianae Religionis progressibus, et certaminibus in Iaponia, anno M. DC. XXII. in Regno Sinarum, M. DC. XXI. et M. DC. XXII. Litterae* 【B】。

¹⁷⁰ 日本関係だけでなく、ポツリのコーチシナ宣教の記録 *Relatione della nuova missione delli PP. della Compagnia di Giesu, al Regno della Cocincina* 【G】を1631年に、前出のスピノラの伝記 *Vita del P. Carlo Spinola della Compagnia di Giesu morto per la santa fede nel Giappone del P. Fabio Ambrosio Spinola dell'istessa Compagnia* 【B】を1628年、そして後出の『チベット・チナ年報』を同年に刊行している。

¹⁷¹ *Lettera annua del Giappone dell'anno 1624. Al molto Reverendo Padre Mutio Vitelleschi Generale della Compagnia di Giesu* 【G】。刊行者はバルトロメオ・ザネッティの相続人。同年ミラノでも刊行された【G】。仏訳はパリ、ラテン語訳はディリンゲンで同年に出た。*Histoire de ce qui s'est passé au Royaume du Japon l'annee 1624. Traduite d'Italien en François, par un Pere de la Compagnie de Iesus* 【L】、*Litterae annuae Iaponicae anni M. DC. XXIV. Datae admodum R. P. Mutium Vitelleschi Societatis Iesu Praepositum Generalem. Ex Italico in Latinum translatae, nunc primum in lucem editae* 【L】。

¹⁷² *Lettere annue del Giappone de gl'anni MDCXXV. MDC XXVI. MDCXXVII* 【B】、同じローマのFilippo Ghisolfiも刊行した。同年ドイツ語版がアントワープで、翌年パリで仏語版が出た。*Iaerliicksche Brieven van Iaponien der jaren 1625. 1626. 1627* 【B】、*Histoire de ce qui s'est passé au Royaume du Japon es annees 1625. 1626. & 1627* 【G】。前者の出版社Jan Cnobbert、後者の出版社Sebastian Cramoisyはともに長らくイエズス会の出版物を扱った。

¹⁷³ 『日本報告集』第Ⅱ期第Ⅲ巻、pp.308, 313。

書いたので、ほかの者が受けた苦しみについて書く」ことにあった (p.186)。「すでに書いた」というのは、この年報と同じ日付を持つモレホンの記述のことで、年報の前に収録されている (pp.114-185)。しかし、「その前に年報通常の要約の形で、教会とわが会の状況について記す。」(p.186)とあるように、一応従来のスタイルを踏襲している。

「日本の世俗、教会とそれを助ける我々の状況」では、江戸の将軍 (Xogun) の新たな統治に、母親の死、そしてうわさによれば父の死も影響することはなく、平和な中で信者の弾圧だけがきびしいとする (p.186)¹⁷⁴。そうしたなかでも、残る会士 18 人 (この年に死んだ者も含む) が 2000 人を入信させていた (p.187)。通常、年報の冒頭を飾り、布教の背景を俯瞰する役割を果たす「世俗と教会一般の状況」の記述がごくわずかなのは、それだけ布教をとりまく環境の情報がマカオに入ってこなくなっていたことを示している。

「長崎のレジデンシア」では、同宿ピエトロ (ペドロ)・リョウサイの働きを特筆する。会士が 6 人に減る一方で、その下働きをする同宿たち (Dogici) の比重が高まっていた。なかでも武士出身のピエトロはセミナリオでラテン語と「異教」に反駁する術 (日本語による弁論術であろう) を学び、1614 年の追放時にはマカオに赴いた。やがて日本にもどり、布教に活躍したが、激務に倒れて病死した (pp.188-189)。

さらに、「ポルトガル人や他の長崎の市民が信仰のために被った苦難」の一項を立て、ポルトガル船に対する取り締まりの強化について述べる。奉行 (長谷川) 権六は船の臨検後も、ポルトガル人にすぐには上陸を認めず、上陸後も市内に入らせず、異教徒または棄教者の家に滞在させた。富裕なポルトガル人がある修道士から平戸宛てに託された手紙を発見されて捕らえられ、その船は荷物とともに没収された。フィリピンからの船が入港したが、上陸は禁じられ、長崎から追放されたのに戻ってきたスペイン人商人は逮捕され、棄教を条件に釈放された (pp.191-192)。

「長崎の人々が新しい奉行の到着、権六の離任で受けた苦しみ」の項では、新奉行 (水野守信) の着任により、取り締まりが一層厳しくなったことを述べる。江戸から戻ってきた (末次) 平蔵 (Feizo) による迫害強化については、潜伏していて逮捕寸前までいっ

¹⁷⁴家光の母がこの年に亡くなっているのはたしかだが、秀忠は死んでいない。

たプロクラドールのマヌエル・ボルジェス¹⁷⁵の書簡を引用する (p.196)。しかし、平蔵以上にここで存在感を示すのは、彼がスパイとして使った背教者のベンガル人奴隷であった。彼は自由を勝ち取るために棄教し、主人であった平蔵の副官を告発した。さらに、マニラから来た者をフランシスコ会の在俗会員として告発した。彼の母親は日本人でコスメ・デ・トーレスが布教していたころに入信した古参であり、一家にも敬虔な信者が多く、彼が自分に累が及ぶのを恐れて棄教を勧めても耳を貸さなかった (pp.196-199)。

「新奉行の到来にともなう信者の苦難」では、新奉行水野河内 (Midzuno Cavachi) 守守信の支配下における信者の苦難と志操堅固を述べる。ここでも迫害の主役は水野というより平蔵であり、彼は富裕な者から切り崩しを図り、信仰を棄てても黙っておけばよいなどと甘言を弄して誘惑したが、応じた者は少なかったという (p.202)。さらに、夫の棄教に対して妻が抵抗して翻意させた話 (pp.207-208) や、多くの者が棄教した家族と口もきかなかったこと (p.211) などを述べ、棄教者と信者の間に分断が生じていたことを示唆している。

「ポルトガル船2隻の来航で迫害が激化」の項では、1626年の末にポルトガル人と中国人の船が2隻来航した顛末を扱う。同乗していたマカオの使節¹⁷⁶は、おりしも管区長が逮捕されたところで当局の心証が悪かったが、将軍に宣教師が到来したのは禁令前のことであると理解させて、何とか受け入れられた (p.212)。

「新しい奉行が修道士逮捕のための家宅捜査を命じ、幾人かの信者が職を奪われる」では、奉行と平蔵が捜査で競り合うなか、高来の役人たちは自領から逮捕者を出さないように先手を打って捜索を行い、信者たちの多くは聖画像をもって他の土地へと移ったこと、長崎の町役には平蔵の脅しに屈しかけた者もいて、信仰を護持する者と対立したが、最終的には反省して役職の剥奪をあまんじて受けたことを述べる (pp.213-215)。

¹⁷⁵ 1618年にはマカオで日本のプロクラドールの地位についていた。Josef F. Schütte, *Monumenta Historica Japoniae I*, Romae, 1975, p.781. 日本には1621年に戻り、23年にあらためてプロクラドールとなっている (*DHCJ*, tomo 1, pp.493-494)。1622年9月16日つまり元和大殉教の直後に「日本の殉教者の短報」を書いている。Josef F. Schütte, *El (Archivo del Japón)*, Madrid, 1954, pp.249-250.

¹⁷⁶ 同年派遣されたパウロ・ダ・ヴェイガであろう。Charles Boxer, *Fidalgos in Far East 1550-1770*, The Hague, 1948, p.102.

「長崎で信仰のために投獄された人々」の項目では、大村で発見されたドミニコ会士が獄死し、奉行が江戸に発つにあたって、主な信者が呼び集められ、棄教の意志を問われたが、全員否と答えたものの、没収された財産は返されたという。これを見れば、迫害はまだ極点には至っていなかった (pp.216-219)。

「高来とそのレジデンシア」では、残る会士は5人とし、信者が準備した穴蔵に潜伏していた準管区長コウロスの書簡を引用する (pp.219-222)。彼の潜伏期間はこの年の1月から9月にまで及んだ。

ここから長崎以外の各地に移る。天草では2人の神父 (p.224)、筑後では1人の神父 (p.226)、豊後では神父・同宿各1人が活動していた (p.227)。上 (Cami) 地方にはまだ6人の神父と1人の助修士と多くの同宿が活動しており、大坂・堺で640人が入信した (p.229)。

とりわけ成果を挙げていたのが日本人神父¹⁷⁷であり、将軍の親戚である紀国 (Quinocuni) や尾張、さらには越前・加賀、多くの信者がいる佐渡の銀山 (miniere d'argento) へと赴き、ついで信濃を経て江戸にまで至り、そこで出会った同宿は諸国で400人を入信させていた。二人は諸国で330人を入信させて上に戻った (pp.230-234)。

中国・四国では神父と同宿各1人 (p.234)、奥州・出羽では3人の神父と1人の助修士が布教にあたり (p.237)、便船がなくてエゾに渡れなかったが、エゾから告解をしに信者が神父を訪ねてきた (p.240)。

この後は、日本人信者の死の記事が続く。奥州津軽高岡で火あぶりとなったトマス助左衛門 (1625.12.27)、イグナシオ茂左衛門 (1626.1.10)、会津若松で斬首されたコスメ林勘解由 (1626.1.25)¹⁷⁸である。

こうしてみると、殉教の色が濃いとはいえ、まだ年報の体裁を保ち得ているし、各地に配置された会士、信者の殉教の日付も把握されている。それは同じ日付に書かれ、

¹⁷⁷ おそらく、ディオゴ結城であろう。彼については、1625年に総会長顧問あてに手紙を送ってからその後の十年間の事跡は知られていない (H. チースリク『キリシタン時代の邦人司祭』キリシタン文化研究会, 1981, pp.203-204) が、他に該当者が見当たらない。式見マルティーニョの可能性もあるが、彼は主に東北で活動していた。

¹⁷⁸ 同年報の原本によれば、1月15日である。Juan Ruiz-de-Medina S.J., *El Martirologio del Japon 1558-1873*, Roma, 1999, p.550.

年報とセットになっているモレホンの記述にも言えることである。

上書のタイトルからは、1627年報告も収録しているかに見えるが、実際には6年後に棄教することになるクリストヴァン・フェレイラによる高来における迫害の報告(1627年9月14日作成)に過ぎない。

また、1628-30年の東北地方の状況を記した書が1635年にコルベレッティによって刊行され¹⁷⁹、この中にクリストヴァン・フェレイラ執筆(1631.8.20)の1629.30年報が収録されている。原文書のタイトルは年報(Annua)であるが¹⁸⁰、「一般状況」がない。もはや、語るべき「全体」は崩れてしまったのである。

一方、殉教の情報はこの後も積み上げられてゆく。マカオでその整理にあたったのがモレホンであった。1624年5月、デッラ・ヴァッレと別れてインドを発ったモレホンはシャム・カンボジアを経て日本に再入国しようとしたがならず、マニラを経て1625年9月にマカオに到着した。シャム沖でスペイン人が起こした事件の後処理のための使節団に加わった後、1626年8月にマニラに戻り、首尾を報告してマカオに戻った。1627年に作成した日本における殉教報告はマニラに送られ、かつて彼がメキシコ経由でヨーロッパに戻る途中に迫害報告を出版したのと同様に、翌年メキシコで刊行された¹⁸¹。

1628年にも前年の殉教録を全18章にまとめて(9月27日作成)、マニラ経由でメキ

¹⁷⁹ *Relatione delle persecuzioni mosse contro (ママ) la fede di Christo. In varii regni del Giappone ne gl'Anni MDCXXVIII. MDCXXIX. e MDCXXX. Al molto Reverendo in Christo P. Mutio Vitelleschi Preposito Generale della Compagnia di Giesù* 【B】。フェレイラの報告と29年7月2日のジョヴァンニ・バッティスタ・ボッロの巡察師アンドレ・パルメイロ宛報告から成る。同年、ギロソフィもローマとミラノで刊行し【L】、パリで仏訳、アントワープではラテン語版が出た。*Relation de la persecution du Japon, pour les années mil six cens vingt-huict, vingt-neuf, trente. Envoyée au R. P. Mutio Vitelleschi, General de la Compagnie de Jesus. Traduite de l'Italien imprimé à Rome* 【L】。*Narratio persecutionis adversus christianos excitatae in variis Iaponiae regnis ann. M.DC.XXVIII. M.DC.XXIX. M.DC.XXX. Ad admodum Reverendum in Christo Patrem P. Mutium Vitellescum Praepositum Generalem Societatis Iesu. Italicè Romae excusa: ac Latinè reddita à quodam eiusdem Societatis Sacerdote.*

¹⁸⁰ 尾原前掲書 p.277.

¹⁸¹ 前出の *Triumphos, Coronas, Tropheos*. 全23章中、野間一正が10章まで翻訳している。「1626年、イエズス会士モレホンの日本迫害報告書-1-」『キリスト教史学』17, 1966, pp.52-70, 「モレホンの日本迫害報告書(その二)」『キリスト教史学』23, 1970, pp.1-12.

シコに送り、1631年にまたしてもメキシコで刊行されている¹⁸²。本書の原稿をメキシコにもたらしたプロクラドール、ホアン・ロペスの献辞によれば、モレホンが1630年にマニラに来た時に、1627年の殉教についての総長宛ての報告を渡されて、カーザやコレジオで読み上げ、メキシコでも同様にして効果があったので、出版を決意したという。モレホンは同年、日本の殉教者についての証言を行うためにマニラに来ていたのである¹⁸³。

そして、マカオに戻ると翌年1月23日には1627～30年までの殉教記録を作成し、5月10日付のローマのヴィルジリオ・チェパーリ宛て書簡では、「布教当初からの迫害記録を作成し、現時点で知られる殉教者は1200人」と述べ¹⁸⁴、これは17章立てでまとめられた¹⁸⁵。彼はこのように殉教の歴史を禁令前までさかのぼって総括する一方で、6月15日には近時（1629, 30年）の殉教記録をまとめている¹⁸⁶。

このように、モレホンがひたすら殉教者の記録を集めたのは、彼らの列福・列聖を始動させるためであった。当初、必ずしも日本の殉教者（のちの26聖人、うち6名はフランシスコ会士、3名がイエズス会関係者）の顕彰に熱心でなかったイエズス会が1627年の彼らの列福あたりから態度を変えてゆくことは、小俣ラポー日登美が明らかにしているところだが¹⁸⁷、モレホンはマカオにおいてその動きを代表する人物であった。

しかし、注意したいのはこれらモレホンの殉教報告に、1626年のそれを除いてイタ

¹⁸² *Relacion de los martyres del Iapon del Año de 1627. Por el Padre Pedro Moreion Rector del Collegio de la Compañia de Iesus de Macan. Hazela imprimir el Padre Iuan Lopez Procurador general de la misma Compañia de la Provincia de Philipinas. Y dedicala al General D. Iuan de Arcarasso Governador de las fuerças de Isla hermosa frontera de la gran China, y de los Reynos del Iapon por su Magestad, &c. [M].*

¹⁸³ J. F. Schütte S. J., *Introductio ad historiam Societatis Jesu in Japonia 1549-1650*, Romae, 1968, p.439.

¹⁸⁴ *id.* p.272, n.21.

¹⁸⁵ “Sumaria y breve relación de los gloriosos mártires que en los reinos de Japón ha havido desde el principio de aquella Iglesia hasta agora.” 結城了悟「ペドロ・モレホンの日本殉教者に関する報告（1557-1614年）」『キリシタン研究』第15輯、吉川弘文館、1974、pp.303-352.

¹⁸⁶ “Relacion de lo sucedido en los reinos de Japon y martires que en el savido el año de 1629 y 30.”

¹⁸⁷ 『殉教の日本 近世ヨーロッパにおける宣教のレトリック』第2章「日本の殉教者の初めての聖性公認」, 名古屋大学出版会, 2023.

リア語で出ているものはないということである。1637年に来日したフランチェスコ・マルチェロ・マストリリの殉教短報・伝記は殉教直後にいくつも出されたが¹⁸⁸、彼がイタリア人であるにかかわらず、年報のようにイタリア語のものが翻訳によって広まったという形跡はない。イグナティウス・スタフォードによる伝記が1642年にヴィテルボで刊行されているが¹⁸⁹、スペイン語版の翻訳である。

ここまで煩をいとわず、イタリア語日本年報の出版とその翻訳状況を辿ってきたのは、イエズス会の海外宣教関係の出版における圧倒的な存在感とヨーロッパへの放射状の広がりを示すためであった。しかし、年報そのものが成立しがたい状況へと転じると、少なくともイタリア語世界では海外宣教関係の本が激減する。そのことをいかに考えればよいのだろうか。

第4章 エチオピア

前述したように、サラゴサそしてメキシコで刊行されたモレホンの両書にはエチオピア関係の記述があるが、イエズス会にとってエチオピアとはどういう存在であったのか。

エチオピアは4世紀以来、ローマ・カトリック教会とは別の道を歩んできたが、中世には両者の間に交渉もあり、1481年にはエチオピアの使節団がローマを訪問し、教

¹⁸⁸ *Relacion del insigne martyrio, que padecio por la Fe de Christo el Milagroso P. Marcelo Francisco Mastrilli de la Compañia de Iesus en la Ciudad de Nangasaqui de los Reynos del Iapō a 17. dias del mes de Octubre deste año pasado de 1637* 【B】, *Breve relacion del martirio del Padre Francisco Marcelo Mastrillo de la Compañia de Iesus, martirizado en Nangasaqui, Ciudad del Xapon en 17. de Octubre de 1637. embiada por el Padre Nicolas de Acosta, Procurador del Xapon, al Padre Francisco Manso Procurador general de las Provincias de Portugal de la dicha Compañia en Madrid* 【B】, Ignatius Stafford, *Historia de la celestial vocacion, misiones apostolicas, y gloriosa muerte; del Padre, Marcelo Francisco Mastrili, hijo del Marques de S. Marsano, Indiatico felicissimo de la Compañia de IHS a Antonio Telles de Silva* 【G】。スペイン語での出版が突出しているのは、彼がナポリ王国の出身であること、国王夫妻の強力な後押しでインドに向かったことも関係していよう。

¹⁸⁹ *Istoria delle celeste vocatione, missioni, apostoliche, e gloriosa morte del P. Marcello Francesco Mastrilli Indiano felicissimo della Compagnia di Giesù. Composta dal padre Ignatio Stafford della medesima Compagnia in lingua Castigliana* 【G】。

皇シクストゥス4世からエチオピアの僧侶に修道院が与えられた。ポルトガル王によるプレスタ・ジョン探査が結果的に西欧とエチオピアの本格的な交渉へとつながったことはよく知られているが、エチオピア人の存在自体は少なくとも中東地域では珍しくなかった。聖墳墓教会にエチオピア正教徒も一角を確保していたし、デッラ・ヴァッレもエルサレム巡礼に向かう途中に「アビシニア人の司祭」に会っている¹⁹⁰。イエズス会はかなり早い段階からコプト教会をローマ教会の傘下におさめるべく活動していたので、アレクサンドリア教会から送り込まれた司教（アブナ）を教会のトップにいたっていたエチオピアの教会人のことはある程度把握していたはずである。

しかし、イエズス会とエチオピアの本格的なかわりかは、総大司教派遣のプロジェクトによってであった。最初に任命されたジョアン・ヌネス・バレットは結局インドから先に進むことはできなかったが、そのかわりに派遣されたアンドレス・デ・オビエドは1557年にエチオピアに到着した。しかし、これを政治的に利用したエチオピア皇帝とオビエドの強硬姿勢がぶつかり、オビエドはポルトガル人の居住地フェルモナに退隠してその地で1577年に亡くなり、同伴した会士たちも物故し、新たに送り込まれた宣教師も殉教するなどして、1600年の段階では教線はほとんど絶えるかに見えた。

それでも、1601年刊行のルイス・デ・グスマンの『東インドおよびチナ・日本の諸王国においてイエズス会士が聖なる福音を広めるために行った布教の歴史』¹⁹¹でもエチオピアには20頁分を費やしているし¹⁹²、すでに見た総年報においても、インドに付属する形で、1581年¹⁹³、82年¹⁹⁴、94/95年¹⁹⁵、97年¹⁹⁶に取り上げられている。

しかし、エチオピアへの注目が高まったのは、一度渡航に失敗したペドロ・パエスが再度試みて成功し、宮廷に到達した1603年以後のことである。その成功に際しては、

¹⁹⁰ 1843 ed. vol.1, p.254.

¹⁹¹ *Historia de las misiones que han hecho los religiosos de la Compañia de Jesus, para predicar el Sancto Evangelico en la India Oriental, y en los Reynos de la China y Japon.* 新井トシ訳『グスマン東方伝道史』上下、天理時報社、1944.

¹⁹² 拙稿「日出づる処」pp.327, 334-338.

¹⁹³ pp. 103-104.

¹⁹⁴ pp. 110-111.

¹⁹⁵ pp. 865-868.

¹⁹⁶ pp. 553-563.

イエズス会がインド西北のディーウに1600年に拠点を置き、アフリカ東岸にも交易を展開していたバニヤ商人を介してオスマン帝国に付属する地方長官たちと渡りをつけたことが大きかった¹⁹⁷。

前掲のグレイロによる年次報告集、そしてそれにもとづいて1614年に刊行されたピエール・デュ・ジャリックの『ポルトガル人が発見した東インドおよびその他の国々でキリスト・カトリックの信仰の確立と進展において記憶すべき出来事の歴史』第3巻¹⁹⁸には、会士の再入国以降の歩みがかなり詳細に辿られている(pp.235-349)¹⁹⁹。

しかし、イタリア語年報に収録されるようになったのは、1620年代に入ってからであった。上掲の1621年刊行の1615-19年の東インド情報をまとめた一書(注160)の中に、ペドロ・パエスの総長宛て1617年7月3日付書簡とともに、ゴアで1620年2月18日に作成された1619年報が収録されている²⁰⁰。

記述は「ゴアの年報を書いた後、ヨーロッパへの船が出る前に書いた。時間の制約のために短いものとなる。皇帝(スセニョス)とその弟ゼラ・クリスト²⁰¹の庇護のもとに、帝国はほぼローマ教皇に服した」(p.148)と切り出す。皇帝は教会を訪問し、ロヨラがエチオピアの神父に送った伝ルカ作の聖母像の写しを見てミサに臨み、新たな教会を建てる地所を与えた(p.150)。1618年の終わりには2つの彗星があらわれて、疫病が流行し始めたこと(p.151)、皇帝が周囲の反対を押し切って、伝統的なサバトの遵守を禁じ、キリストの両性を認め、反対する者からは財産を没収すると布告したこと(pp.153-154)、ゼラ・クリストの信仰への熱意を報じるパエスの1619年4月14日付書簡の引用(p.161)²⁰²、ゼラ・クリストの敵が遠征で不在中の彼を追い落とそうと

¹⁹⁷ Andreu Martínez d'Alós-Moner, *Envoys of a Human God, The Jesuit Missions to Christian Ethiopia, 1557-1632*, Leiden/Boston, 2015, pp.58-79.

¹⁹⁸ *Histoire des choses plus memorables advenues tant ez Indes orientales, que autres païs de la decouverte des Portugois, en l'establissement et progres de la foy Chrestienne et Catholique*. 第3巻は16世紀を扱った第1・2巻の続巻である。

¹⁹⁹ 拙稿「日出づる処」pp.379-381.

²⁰⁰ この年報はエチオピア関連のイエズス会士の著述を集めたアンソロジーである前掲注21 Camillo Beccari, *op.cit.* のうち、当該時期の書簡を収録する第11巻に載せない。

²⁰¹ 彼の政治的位置を検討したものに、石川博樹「17世紀前半ソロモン朝のペド・ワッダドーイエズス会のエチオピア布教失敗の一要因」『オリエント』43-2, 2000, pp.99-116がある。

²⁰² 本書簡も Beccari, *op.cit.* に載せない。

画策したが、戻ってきた彼が皇帝のもとに弁明に赴き、最終的には受け入れられたこと (pp.164-165) などを述べ、最後に皇帝がガラ人との戦で勝利をおさめ、「このままゆけば信仰をカイロさらにパレスチナにまで広げられるかもしれない」と希望の言葉でしめくくる (pp.171-172) ²⁰³。

ついで、1627年に1620-24年のエチオピア・マラバル・ブラジル・ゴアの年報をまとめた一書がフランチェスコ・コルベレッティのところから出た (343 pp.+正誤表) ²⁰⁴。エチオピアの年報が冒頭のトマス・デ・パロス ²⁰⁵ の1本 (1622年7月27日作成) だけなのに対し、ゴアは1620, 21, 23, 24の4本を収録するが、実はゴア年報のうち日本年報の執筆者でもあったジローラモ・マヨリカの1621年報 (21年12月2日作成, pp.177-242) は、エチオピアの記事がかなりを占めている (pp.211-241)。

ジョアン・ダ・シルヴァ執筆の1623年報 (23年12月11日作成, pp.243-282) も、エチオピアの記事が過半を占める (pp.262-282)。この年だけで8人の宣教師が派遣された。宣教の中心にいたパエスとアントニオ・デ・アンジェリスが前年に死んだことが報じられているが (p.263)、一方で急速な補給が図られたのである。

引用されている皇帝のインド管区長宛て書簡 (pp.264-268) はすでに派遣の報が知らされていた総大司教 (アフォンソ・メンデス) が入国のために取るべきルートを教示するものであり、当時、宮廷にいたルイス・デ・アゼヴェドの巡察師 (バルメイロ) 宛て書簡はアガウ人が数千人単位で入信していることを伝え (p.270)、皇帝が200人の宣教師派遣を求めているがとりあえず30人の派遣を希望するとしている (pp.275-276)。アントニオ・フェルナンデスの巡察師宛て1623年3月8日付書簡では「もし、皇帝かゼラ・クリストが亡くなれば、その後継者はじめ要人たちはカトリックの信仰

²⁰³ モレホンの21年刊本の中のエチオピアの記述は第四部の18章～22章を占め、18「エチオピア事情」19「続き、ペドロ・パエス神父の書簡による」20「エチオピア皇帝の我が国王宛て書簡」21「皇帝が神父たちを訪問し、ヨーロッパ式の教会を建てるよう命じた次第とその他の出来事」22「ゴヤマ (Goyama) 王国で起きたいくつかの改宗、異教徒の新たな改宗の始まり」となっている。皇帝の教会訪問やゴジャマの改宗など一部内容が重なるところはあるが、情報源は年報とは別であろう。

²⁰⁴ *Lettere annue d'Etiopia, Malabar, Brasil, e Goa. Dall'Anno 1620. fin'al 1624.* (Biblioteca Brasiliana Guita e José Mindlin).

²⁰⁵ パロスはインドで活動しており、これもゴアで書かれた年報であった。Sommervogel, *op.cit.*, tome 1, c.928. やはり、Beccari には収録されていない。

を表明しているとはいえ、修道僧たちが黙っていないだろう。少なくとも 20 人の宣教師派遣が必要である」と述べる²⁰⁶。

1624 年報（同年 12 月 15 日作成，pp.283-343）は、冒頭ではデッラ・ヴァッレも描き出すザビエル列聖の祭典について述べるが、287-299 頁はやはりエチオピアの記述である。ただし、宣教の話ではなく、各神父がエチオピアに向かったそれぞれの旅の記録である。アラビア南部の港町 Caxem (Qishn) で書かれたフランシスコ・マシャド神父の手紙を引用し、現地の王がトルコ人の圧力にもかかわらず、ポルトガル人との連携を強化しようとして宣教師を援助したこと（pp.287-290）、その後の行程について述べる 1624 年 6 月 1 日付ベルナルド・ペレイラの書簡は、アフリカ側のゼイラに無事到着したことを伝える。パニヤの船長が来て「イエズス会士を毎年ゼイラに連れてきてもよい」と言ってきたのは、ディーウの院長が関税の担当者に便宜を図ったためであったという。神父たちがここからキャラバンでエチオピアに向かったというところで、話は終わっている（pp.290-296）²⁰⁷。

つづいて、マスワ・ルートを取ったエマヌエル・ラメイラとその同行者たちについてラメイラの書簡²⁰⁸によって述べる。別動隊の巡察師ミゲル・アルメイダとその同伴者がスアキンに無事到着し、当地のパシャから厚遇されたことを伝える。ディーウからの航海は安全で、長官へのプレゼントを持っていけば「我々の服装で」（トルコ人やアルメニア人に変装せずに）上陸することができると述べ、前世紀の状況とは隔世の感がある（pp.296-299）。この時、渡航に失敗したのはメリンディ経由の道を探った 2 人だけだった。

そして、1628 年には、エチオピア年報が単独で刊行された（232 pp.）²⁰⁹。1624/25 年・

²⁰⁶ Beccari, XII, pp.31-33 にはシルヴァがラテン語で作成したものが載る。その英訳は *The Jesuits in Ethiopia (1609-1641): Latin Letters in Translation*, Translated by Jessica Wright and Leon Grek Edited by Wendy Laura Belcher, Introduced by Leonardo Cohen, Wiesbaden, 2017, pp.113-114 に収録。一方、Beccari, X, pp.511-525 にはインド管区長セバスチャン・パレット名義のポルトガル語年報が載る。両者はともに日付が 1623.12.11 となっている。前者には管区長の命により作成とあるので、ポルトガル語の原本をシルヴァがラテン語に翻訳したものであろう。

²⁰⁷ いずれの書簡も、ポルトガル語の原テキストが Beccari, XII, pp.60-68 に載る。

²⁰⁸ Beccari, XII, pp.115-120 にゴア 1624 年報からの抜粋として載せる。

²⁰⁹ *Lettere annue di Ethiopia del 1624, 1625, e 1626. Scritte al M.R.P. Mutio Vitelleschi, Generale della Compagnia di Giesu* 【G】フランス語訳 *Histoire de ce qui s'est passé au royaume d'Ethiopie*

26年の2本をまとめたものである。前者（ガスパル・パエス 1625.6.15 執筆）には、上長の神父が皇帝に依頼して各地に出してもらった布告を彼がローマ教会に服したことを示す材料として引用し（pp.11-18）、これに頑強に抵抗する大物修道士の姿を描き（pp.23-27）、モーセに与えられた聖櫃があるとされる Abagarimo 修道院にイエズス会の神父がヨーロッパ風の祭壇を築き、ミサをあげた際にこの箱を開けたところ、中にはアロンの杖の形をした竹の棒きれしか入っておらず、神父はそれを人々に開示して「ユダヤの信仰をなおも護持している証拠だ」と言って修道士たちの面目を失わせ、箱を廃棄させたが、後に修道士がひそかに持ち帰ったことが露見し、イエズス会の味方である地方長官が箱を破砕して焼かせたこと（pp.59-61, 66-67）、この年異教徒であるアガウ人 24000 人が洗礼を受け、エチオピア教会の信者 20000 人がカトリック信仰に帰したこと（pp.73, 96）など、宣教が順調に進んでいることを報告しながらも、その進展はひとえに総大司教の到来と皇帝兄弟の健在にかかっているとす（p.96）。

来着した総大司教メンデスの総長宛て書簡²¹⁰（1626.6.1）をはさんで、26年報（ガスパル・パエス 1626年6月30日作成）には、総大司教の来着、敵側が「アレクサンドリアから総大司教来る」との報を流すと人々が氣勢を上げたこと（pp.181-182）を述べ、メンデスの来着をとりまく状況が騒然としていたことを記す。皇帝は聖職者たちにメンデスのもとに出頭しなければ聖務を行う権限を取り上げるばかりか、抵抗を続ければ死に処すとの布告を出した（p.184）。印象的なのは、会士たちが宣教のためにとある山の要塞（信者が退避した場所）に登るのを見た男女や子供が大騒ぎし、神父たちが入ってくると人々は絶望しつつ、「古い信仰を棄てるくらいなら首をはねられたほうがましである」と言った（dicendo, che prima sarebbe lor levata testa, che l'antica Fede）ことである（p.195）。結局、彼らは神父の説得により絶望から歓喜に転じるというオチがついているが、「信仰を棄てるくらいなら首を差し出す」という言は、同時期の日本の年報や殉教録に頻繁に見えるものなのである。

Es années 1624, 1625 & 1626. Tirées des lettres écrites & adressées au R.P. Mutio Viteleschi, General de la Compagnie de Jésus. Traduite de l'Italien en François par un Père de la mesme Compagnie.

²¹⁰ 皇帝が総大司教臨席のもとでローマ教会への帰一を公式に確認する儀式の際（1626.2.11）にメンデスが行った演説を長文引用する（pp.120-142）。

1629年には中国年報と組み合わせて出版された(133頁)²¹¹。「これだけ反乱がおきなかったのもエチオピア史上まれなこと」というように(p.4), 少なくともイエズス会士にとっては内外ともに安寧な状態にあった。メンデスによる聖職者の叙任が行われ、司祭個人々にローマの祭式をアビシニア語に翻訳したものが渡され、「知らない」との言い訳は通用しなくなった。「我々だけでは手が足りず、現地の司祭が教えられたことを忠実にやり、信仰が深く根を下ろした。」これが思い込みにすぎなかったことはすぐに歴史が証明することになるが、とりえず聖職者叙任の権能を有する司教の到来がエチオピアにおけるカトリック教会の明るい未来を保証する制度的裏付けだったことは確かである。同時期の日本にはもう司教はいなかった²¹²。

冬には15000人が入信し、その中には頑迷だった皇帝の叔母がいた。王族の女性がカトリックへの帰順に抵抗を示したことが注目されているが²¹³, ここではその改宗が他の王族にも影響を与えたことが強調されている(p.10)。皇后も夫のカトリック導入に反発して夫婦仲は険悪だったが、態度を軟化させ、教会に通うようになり、今年の夫の遠征には同行していた。皇后の影響力の大きさから、これも教会にとってプラスの効果をもたらすと述べている(pp.13-14)。

アントニオ・フェルナンデス神父は儀礼や告解の手引きを現地語で執筆し、彼が教育して司教が叙任した現地人司祭はセミナリオの教師となり、4300人以上を入信させ、もう一人の司祭は6000人を入信させるなど、驚くべき成果を上げている(p.17)。

その他にも数千人単位での改宗が各処で報じられているが、少数のヨーロッパ人司祭でできることではなく、メンデスによる叙任がこうした大きな成果を上げたといっ
てよいだろう。

²¹¹ *Lettere dell' Ethiopia dell' Anno 1626. sino al Marzo del 1627 e della Cina dell' Anno 1625 sino al Febarai del 1626* 【M】. 同年、パリで仏訳が出た。 *Histoire de ce qui s'est passé es royaumes d'Ethiopie, en l'année 1626 jusqu'au mois de Mars 1627. Et de la Chine, en l'année 1625. Jusques en Feburier de 1626* 【G】.

²¹² 宣教師追放前の1614年2月にイエズス会の司教ルイス・セルケイラが亡くなってから、司教が日本の土を踏むことはなかった。

²¹³ Wendy Laura Belcher, "Sisters Debating the Jesuits: The Role of African Women in Defeating Portuguese Proto-Colonialism in Seventeenth-Century Abyssinia," *Northeast African Studies* 13-1, 2013, pp.121-166.

環境も幸いするかに見えた。神は3年間にわたって蝗を「沿海部の分派(schismatics)」の居所や「モーロやユダヤの信仰に染まった者」の住む地域に送り込んだ。蝗害による飢饉に苦しむ人々は、神父たちが施してくれると聞いて、肉体の糧だけでなく、魂の糧を得た (pp.39-40)。一神父からインドの友人に宛てた手紙が引用されるが、ここでも道中で飢えに苦しむ人々に複数回出会って、施しの約束と信仰の受け入れを引き換えにしている (pp.43-44, 47-48)。

その一方で、割礼の風習をやめさせるのが難しい (p.31) と述べ、布教の障害も指摘している。皇帝の近親の女性が洗礼を受けたものの、信仰に迷いがあって神父を呼んだ。彼女は分派の誤りをすべて捨て去るかと問われたが、「救済に必要な割礼以外は捨てる」と答え²¹⁴、神父がいくら説得しても聞こうとしない。カトリックになるのを避けるためにエルサレムに巡礼に赴き、戻ってきた男を神父が説得して入信させたのを見て、頑固な女もようやく納得した (pp.50-51)。

また、既述した聖櫃の話の別バージョンが述べられる。シバの女王のかつての居所のちかくにある寺院にある箱について、女王の子のメネリクが父ソロモンのもとを訪れた時にエルサレムから運ばれた契約の櫃だとする説、女王カンダケが宦官から信仰を受け入れた時に造り、当時まだ生きていたマリアにささげたという説を紹介した後、いずれにせよユダヤ人や偶像教徒が長年利用してきたものでエチオピア人はそれに騙されていたとする。皇帝はこの箱の中身を見たが、ローマの信仰の普及に我慢ならない司祭たちがこの箱を持って逃げ出したという話である (pp.55-59)。護持されてきた伝統を「アレクサンドリアやユダヤの誤謬」としてあえて踏みにじる皇帝にイエズス会士たちは拍手喝采を送っている。最後に、今年のエチオピア全体の入信者を148000人と数え上げる一方で、冒頭の記述とは裏腹に、「しかし、敵はまだ多く、反乱は日常的である」と述べる。著者はこの後「エチオピア史」を著述することになるマヌエル・デ・アルメイダである²¹⁵。

結局、皇帝の強力な支持も抵抗勢力を破砕するにはいたらず、その逆襲によって皇帝は信仰の自由を認めざるを得なくなり、次代のファシラダスによってイエズス会士

²¹⁴ 女性も割礼を受けたが、おそらくここでは女性が子供を産んだ際のことを言うのだろう。

²¹⁵ *História de Etiópia*. Beccari, VI に収録される。

は追放されることになる。この「失敗」の要因としてこれまでメンデスの早急で強引な宣教方法が指摘されることが多かったが、マルティネス・ダロズ・モネルは成功例とされるパエスの宣教方法と大きく異なることはなく、両者の「成否」を分けたのは状況の差であるとする²¹⁶。筆者もこれに同意するが、司教による現地人司祭の叙階の社会的影響力の大きさがこうした反作用を起こしたことは確かであろう。

エチオピアでの宣教は日本のそれと合わせ鏡になっているところがある。ほぼ同じところにイエズス会士による布教が挫折し、カトリック教会に対して門戸が閉ざされた。しかし、エチオピアの場合、宣教史の文脈でイエズス会士の迫害、追放がクローズ・アップされるが、それに至る過程では宣教師が迫害側にいたというのが、日本との大きな違いである。司教を送りこめる状況にあるか否かがこの違いを生んだのである。

第5章 中国

中国宣教にも迫害はそれなりに存在したが、日本やエチオピアのような劇的なドラマはなく、両国の門戸が閉じられた17世紀中葉以後も、徐々に地歩を固めてゆくことになる。年報の刊行もまたそうした歴史を一面で反映しており、最初は日本の付録扱いでさほど目立たなかったが、17世紀になるとその存在感を徐々に高めてゆく。

1586年にローマのザネッティが刊行した書に、入華して間もないリッチ、ルッジェーリの書簡が収録されたのが第一歩であった²¹⁷。前年にアウグスティノ会・フランシスコ会士の入華経験にもとづいたゴンサレス・デ・メンドーサの『シナ大王国誌』がローマで刊行されていたが、そのイタリア語版がこの年にローマやヴェネチアで公刊されている²¹⁸。これまでに刊行されたイエズス会士の書簡集にも中国関係のものがなければ²¹⁹、会士自身の経験を語ったものではなかった。イエズス会は中国情報の公

²¹⁶ D'Alos-Moner, *op.cit.*, p.278.

²¹⁷ 注122。その英訳が、M. Howard Rienstra ed.and trans., *Jesuit Letters from China 1583-84*, Minneapolis, 1986.

²¹⁸ *Dell' historia della China*.

²¹⁹ たとえば、1556年にローマで刊行された *Avisi particolari delle Indie di Portugallo. Novamente havuti questo Anno del 1555 da li R. padri della Compagnia di Iesu dove si ha infomatione delle gran cose che si fanno per aumento de la Santa Fede. Con la descriptione e costumi delle genti*

開という点では後発だったのである。しかし、前述したように本書はイタリアの複数の地で刊行されたほか、仏語・独語訳も出ているので、主題が日本であるといっても、中国の記事もそれなりに注目を集めた可能性はある。

1588年にもやはり日本関連の情報とセットで書簡が公刊されている²²⁰。表題はチーナが先に来ているものの、中国書簡は1本だけで²²¹、主な内容は表題 (*con l'arrivo delli Signori Giaponesi nell'India*) に現れているように、当時注目を集めていた天正少年使節のインド帰還である。

1591年にも日本・中国書簡が合刊されたが、大半は日本関係である²²²。収録されるアルメイダの書簡には広東の長老が当局に宣教師の追放を訴えたことを載せ²²³、布教の困難が浮かび上がる。

このあと、しばらく中国書簡が出版されることはなく、1600年に1598年の日本年報やモゴル情報と抱き合わせて刊行された²²⁴。収録されたロンゴバルド書簡(1598.10.18)はリッチの盟友である瞿太素の長文書簡を含んでいるのが特徴である。同書簡はマントヴァで翌年単行の形で刊行され²²⁵、これは同年ラテン語訳(マインツ)、翌年には仏訳(パリ)もされている²²⁶。

1603年に中国情報の単行本が刊行された²²⁷。出版社はザネッティである。マカオのコレジオ(pp.4-18)、リッチらの二度目の上京(pp.18-57)、南京・南昌のレジデンシア

del Regno de la China, & altri paesi incogniti novamente trovati 【B】は表題にある通り、中国事情についての情報を含むが、これは中国で囚われの身となっていたポルトガル人がマラッカでイエズス会士に口述した記録である。

²²⁰ 注 126。

²²¹ ルッジェーリとともに浙江杭州まで旅したアルメイダの書簡(1586.2.10)。

²²² 注 127。

²²³ アルメイダのトゥアルテ・デ・サンデ宛書簡(1588.9.8)。

²²⁴ 注 140。

²²⁵ *Breve relatione del regno della Cina, nella quale si dà particolar conto dello stato presente di quel regno, della dispositione di quei popoli alla fede christiana, & de' lore costumi, studij, & dottrina.*

²²⁶ *Recentissima de amplissimo Regno Chinae: Item de statu rei Chrisitianae apud Magnum Regem Mogor et de morte Taicosamae Iaponiorum Monarchae* 【B】, *Nouveaux avis du Grand Royaume de la Chine, escrits par le P. Nicolas Lombard de la Compagnie de Jesus, au T.R.P. Claude Aquaviva General de la mesme Compagnie* 【Ga】

²²⁷ *Lettera della Cina dell' anno 1601* 【G】

の情報 (pp.58-108) をまとめたもので、1602年1月25日にヴァレンティン・カルヴァーリョがマカオで作成した。翌年、ミラノ、ヴェネチアで刊行され、リエージュで仏訳が出て、1605年にパリでも刊行されている²²⁸。本書により、中国で活動する会士たちの積年の夢であった北京定住に至る過程が知られることになる。

そして、リッチと共に北京で活動することになったパントーハの書簡こそが、『シナ大王国史』では具体的に語られることがなかった北京の状況をはじめてヨーロッパに広く紹介しただけでなく、様々な側面を描き出すことでかなりの影響力を持った²²⁹。

中国年報については、ジョゼフ・ドゥエルニがリスト・アップし²³⁰、近時では董少新が注目しているが²³¹、いずれも年報の稿本に注目したものである。董によれば、正式な年報は1618年に始まるということであるが²³²、出版された報告にはすでに *annua* の名称を取るものがある。

1610年に出版された1606.07年報(47 pp.)²³³は通常の年報の冒頭に来る「一般状況」の話がなく、当時のメンバーが学生を含めて25人(うち神父13人)が4つのレジデンシアに駐在していることを述べた後に、その一つである韶州のカーザの項目を立てる。執筆者はマテオ・リッチである。インドへの便船が二年間なかったためにまとめて送られたものであり、執筆の日付は1607年10月18日であった。ミラノで同年刊行され、翌年に日本の年報との組み合わせで、フランス語・ラテン語版・ポーランド語版が刊行されている²³⁴。他国で日本との抱き合わせになっているのは日本の影響力の大

²²⁸ *Lettre de le Chine de l'an 1601* 【Ga】

²²⁹ Sommervogel, *op.cit.*, tome 2, c.792. リエージュ版 *Copie d'une letter envoyée du grande Royaume de la Chine, l'an 1601*, パリ版 *Lettre de la Chine de l'an 1601*.

²³⁰ Joseph Dehergne, S.I., "Les Lettres Annuelles des Missions Jésuites de Chine au Temps des Ming (1581-1644)," *Archivum historicum Societatis Iesu* 49, 1980, pp.379-392, "Les Lettres Annuelles et sources complémentaires des missions jésuites de Chine (suite)," *Archivum historicum Societatis Iesu* 51, 1982, pp.247-284.

²³¹ 董少新「17世紀来華耶穌会中国年報評介」『歴史檔案』2014-4, pp.128-132. 董はその史料的价值に注目して、正式な年報の嚆矢である1618年報をまず紹介している(後出)。

²³² マカオ・コレジオの年報作成はこれより早い。中国内地の事情を紹介することもある。João Paulo Oliveira e Costa, *Cartas Ánuas do Colégio de Macau (1594-1627)*, Macau, 1999.

²³³ *Annua della Cina del M.DC.VI. e M.DC.VII del padre Matteo Ricci della Compagnia di Giesu.* やはり、ザネッティから出ている。

²³⁴ 注148～150。

きさを示すものと言えるかもしれない。

リッチの年報がヨーロッパで刊行されたところに彼は亡くなっていた。その死は中国宣教団にとっては大きな打撃であったが、それゆえにこそ、ヨーロッパに代表を送り、宣教の支援を乞う必要があり、送り出されたのがニコラ・トリゴーであった。彼はリッチのイタリア語による中国概論と宣教の記述をラテン語に訳編してアウクスブルクで1615年に刊行した²³⁵。本書の影響力の大きさについては言うまでもないだろう。同年、トリゴーが中国そしてヨーロッパに戻る途中コーチンで執筆した年報がまとめて刊行された(221 pp.)²³⁶。ミラノ版も刊行され、その「献辞」には「アウクスブルクで出版される本がイタリア語でもまもなく刊行される」と述べているが、この書簡集はいわばその続編というべきものであった。一方、アウクスブルクでは1615年に1610年報(韶州, 1611年11月作成)と11年報(上掲のもの)の組み合わせで出版されている(294 pp.)²³⁷。

1613年から15年の年報は出版されていない²³⁸。1616年に南京を震源地とする迫害が発生した²³⁹。これにより、当時中国内地にいた神父のうち、北京・南京の各2人が追放されるにとどまったが、リッチ死後も着々と地歩を固めつつあった中国宣教にとって一頓挫であったことには違いない。そこからの回復の物語が、公刊年報で語られてゆくことになる。

1616/17年報は既出の日本・ゴア年報との合刊の形で1621年に出た²⁴⁰。マカオにいた巡察師のセバスチャン・ヴィエイラの命により、当時日本から追放されていたカミロ・コスタンツォ、すなわちデッラ・ヴァッレがその殉教を3年後に知ることになる人物によって書かれた(1618年1月15日)。すでにみたように、彼はこの年の日本年報も

²³⁵ *De Christiana expeditione apud Sinas*

²³⁶ *Due Lettere Annue della Cina del 1610 e del 1611* 【G】。ミラノでも刊行された【G】。

南京で執筆した11年報が1612年8月、コーチンで執筆した10年報が13年5月と逆転しているのは、コーチンで改めてラテン語に訳編したからである。

²³⁷ *Litterae Societatis Iesu e regno Sinarum Annorum MDCX. & XI. ad R. P. Claudium Aquavivam eiusd. Societatis Praepositum Generalem* 【G】

²³⁸ 後出の記述のように1615年報は書かれている。

²³⁹ 迫害については、Ad Dudink, “Nangong Shudu (1620), Poxie Ji (1640), and Western Reports on the Nanjing Persecution (1616/1617),” *Monumenta Serica* 48, 2000, pp.133-265 を参照。

²⁴⁰ 注 160.

執筆している。おそらく、日本の場合同様に彼はラテン語への翻訳者であろう。

この年報は通常の状態を取ってはいない。冒頭で「1616, 17年の迫害について述べ、15年の書簡（年報）に述べなかったのは、迫害がやがて終わると期待していたからである」とする（p.178）。本来、15年の時点では迫害は発生していないのだから述べる必要がないように見えるが、年報の執筆時点ではすでに事が起きていたから最近の情勢として一言してもよいのにしなかったということだろう。たしかに、南京礼部尚書沈澹の告発に始まる迫害は、急速に展開したわけではなかった。

コスタンツォは最後に「友人たち」（士大夫信者やシンパであろう）が「2, 3年すれば復帰できるだろう」と励ましてくれていることに触れ、その希望に付け加えるとして、「神がこの人々に下した予兆と罰（*prodigij, e gastighi*）」を示した証は、「官人たちが安眠をむさぼっている王の目を覚まさせるべく、大いなる不幸を要約した上奏」に見て取れるとして、タルタル人（満洲人）の侵入時に北京の官僚たちが行った上奏を引用する。上奏は、かかる事態は他の多くの予兆的な災厄とともに「天の復讐（*vendetta del Cielo*）」と言われていると指摘し、北京の長雨、山東から南京を襲った蝗害、北京で頭に日本の角を持つサルに似た赤子が生まれたこと、天に二日が現れて片方が片方を食ったことなどを挙げ、万曆帝に猛省を促す内容となっている。コスタンツォは上奏の内容は多方面から裏がとれており、前回の年報（*ultima annua*）にも述べられ、マニラの同志も保証している²⁴¹としたうえで、「これらめしいたる異教徒（*cieci gentili*）」はすべてを統治の欠落に帰しているが、真の原因は福音に門戸を閉ざしたことにあるだろう」とする（pp.248-254）。

リッチの北京滞在は政治万般に関心を失っていた万曆帝の治世であったからこそ実現したとも言え、それもあって宣教師たちの彼への評価は当初好意的なものであった。今次の迫害にあっても、皇帝はなかなか裁断を下さなかった。しかし、結果的に神父たちの追放は「王の判決（*Sentenza del Rè*）」（p.218）によるのであり、彼らにとって皇帝は日本で宣教師を追放した「内府様」（徳川家康）と選ぶところはなかった。

²⁴¹ マニラにやってきた華人がもたらしたニュースが同地のイエズス会士によって伝えられたのであろう。

1624年には1618, 20, 21年報が合刊された(252 pp.)²⁴²。バルトロメオ・ザネッティの刊行である。表題は19年となっているが、18年12月7日にマカオでマヌエル・ディアス(迫害により、追放された四神父の一人)が作成したものであることを、同年報の訳注を作った董少新らが指摘している²⁴³。「俗世の状況」ではやはり蝗害、王宮を流れる川が血の色になる、山東の白・青竜の出現、2つの彗星、2つの太陽などの奇怪な「神罰」について記す(pp.4-8)。「教会の状況」の主人公はあいかわらず、教敵の沈淮であり、「杭州の住院」の項目では、神父たちの最大のパトロンだった楊廷筠が主役である。20年報を執筆したのは前出のキルヴィツァーで、記述はトリゴー率いる宣教師団22人²⁴⁴のインドから中国への旅に始まるが²⁴⁵、その後は通常の年報スタイルをとる。「この国では新参者(nuovi forastieri)の我々ドイツ人²⁴⁶」が中国から追放された神父と日本のベテランたちに迎えられる格好となった(p.67)。この年報もやはりマカオで記されたが(20.11.28)、トリゴーの21年報は杭州で書かれた(1622.8.24)。万暦の遺詔を翻訳し(pp.108-111)²⁴⁷、新王(泰昌帝)が諸政一新の期待をかけられて即位したことを詳しく紹介した(pp.111-120)後、彼が頓死して立った新帝の名、天啓の意味を「開かれた天(Cielo aperto)はキリストの光輝が広がる時代」だとする(p.122)。満洲人との戦争により、徐光啓らは西洋製大砲の必要性を訴えてこれをマカオから調達することを政府に認めさせ、その機会に宣教師の再入国を実現させようとしていた。この時は大砲だけは引き取られ、砲手はマカオに送り返された。しかし、「それは神の配慮

²⁴² *Relatione delle cose piu notabili scritte ne gli anni 1619. 1620. 1621 dalla Cina* 【G】。同年、ミラノで刊行され、翌年ミラノで再刊された。1625年、パリで刊行された *Histoire de ce qui s'est passé es Royaumes de la Chine et du Japon, Tirées des lettres écrites és années 1619, 1620 & 1621* 【G】は、その翻訳である。表題には「日本」とあるが、実際には収録されていない。

²⁴³ 董少新, 劉耿「<1618年耶穌会中国年信> 訳注并序(上)」『国際漢学』14, 2017, pp.133-146, (下) 同15, 2018, pp.177-183.

²⁴⁴ インド到達前に5人が死に、インドで船を待っている間に2人が熱病で亡くなり、残り15人のうち中国に向かったのは5人であった(p.63)。

²⁴⁵ 1620年にパリで刊行された *Narré véritable de la persecution excitée contre les Chrestiens au Royaume de Chine* はマカオに追放されたアルヴァロ・セメードの書簡の抜粋だが、同書の付録に1619.1.19付のゴア発のキルヴィツァー書簡の抜粋が載る。

²⁴⁶ キルヴィツァーはボヘミア出身。もう一人のドイツ人はアダム・シャル。

²⁴⁷ 万暦帝の遺詔は『神宗実録』巻596万暦48年7月戊戌条に載る。省略もあるが、ほぼ忠実な翻訳である。

によるものであり、翌年の年報での続報を約束する」と述べる (p.140)。「教会の状況」では、トリゴーがもたらした枢機卿のイエズス会士ロベルト・ベラルミーノの信者宛て書簡と徐光啓の答書が翻訳され (pp.155-162)、各地の住院の記述も盛りだくさんで、刊行年報では最長の分量である。官人の馬進士 (Dottore) に随行してのアルヴァロ・セメードの旅に関する記述も詳しい (pp.192-223)。揚州から陝西までを横断する旅であり、これまでの宣教師にはなかった経験であった。

1627年には前出の日本年報と組み合わせた本が出版された²⁴⁸。トリゴーによる21年報は1622の聖母被昇天 (Assunta) の日すなわち8月15日に執筆されたもので、前出の同人による年報より1週間早い執筆で内容も異なる (pp.159-248)。万暦の遺詔やセメードの旅の記述はない。おそらく、これらの材料を入手したのを契機にして全面的に書き直したのではないだろうか。これに続く22年報 (1623年6月23日作成, pp.248-310) はセメードの手になり、迫害の犠牲となり亡くなった中国人信者アンドレアに一項が設けられる以外は通常のスタイルである。p.311は正誤表で、次のページには余録がある。32頁(つまり日本の部分)にスペイン人に混ざって登場するアンジェロ・フェレリオはイタリア人の名家オルスッチ家の出でルッカの修道院でドミニコ会に入り、スペインで修行中にフェレリオと名乗り、フィリピン経由で日本に渡って殉教したこと、彼については母や弟に送った複数の書簡を入手しているらしいことが述べられる。32頁をみると、元和の大殉教で死んだ修道士の一人として彼の名が載っている。他会の人間なのに、わざわざここで取り上げるのは、デッラ・ヴァッレが数ある殉教者のなかでもっばら同胞の殉教者の名を挙げたように、彼がイタリア人だからであろう。

翌年にはチベットの1626年の記事との合刊が出た (130 pp.)²⁴⁹。チベット (カタイとも目されていた) の「発見」の記事との組み合わせで、中国のほうは1624年報であり、執筆者はかのキルヴィツァーである。執筆は1625年10月27日であり、彼がモレホンと同行していたとすれば、モレホンがマカオに戻ったのが9月なので、その約1か月後の執筆ということになる。

²⁴⁸ 注 169。ミラノでは Gio. Battista Cerri が刊行した。

²⁴⁹ *Lettere annue del Tibet del MDCXXVI e della Cina del MDCXXIV* 【G】

前出のセメードの旅行は今後の宣教の展開のための下見の性格を持っていたが、本書には「河南・山西・陝西へのミッション」の項目が設けられた (pp.112-120)。北京そしてパトロンの故郷杭州 (楊廷筠)・上海 (徐光啓), 迫害の傷跡からようやく立ち直った南京, さらに南昌などの従来の基地から発展してゆく手がかりが得られたのであり, 信者の数はともかくとしても, 宣教師の活動域が急速に広がった²⁵⁰。

そして, 1629年に前掲のエチオピア年報との合刊で「1625年から26年2月までのチナ年報」が出る²⁵¹。冒頭, これまで住院がなかった陝西, 山西, 福建に新たな拠点を作られたことを記す。それでも会士はわずか23人 (神父18人) であった (p.67)。「世俗の状況」では, Gueicum (魏公=魏忠賢) に王者に擬するふるまい (「8月に王の墓を訪れた時には行く手には黄色い土がまかれた」) があっても, 文人たちの多くは屈従したこと, 彼の横暴に対して「無錫という都市で道を論じる文人たちの学院」²⁵²のメンバーが上奏を行い, ミゲル (楊廷筠) もそれにかかわったこと, 学院の批判者の反撃の上奏を汲んだ王が主要メンバー6人の逮捕を命じ, 死においやったこと²⁵³, 以前は北京の3年に1回の試験で合格するのは300人だったが, 現皇帝の祖父である万曆帝が50人増員し, 現皇帝になって409人に増えたものの今年それを300人に減らすことになり, 人民は喜んだが, 官僚は不満を持ったこと²⁵⁴, 今年は監察の年にあたっており, 330人が官職を奪われた中にミゲルも入っており, 表向きの処分理由 (彼の弟が15年前に公金を着服したこと, 異教徒である彼の義子が不正な貨幣使用を行ったこと, 彼が異教徒時代にある坊主と非常に親しくしていたこと) は口実に過ぎず魏公批判の上奏が処分につながったこと²⁵⁵, 北京から遠く離れた貴州・四川・雲南で反乱がおきたが

²⁵⁰ 拙稿「イエズス会士フランチェスコ・サンビアシの旅」『アジア史学論集』3, 2010, pp.30-69 参照。

²⁵¹ 注211。

²⁵² 東林書院のこと。

²⁵³ 楊漣ら「東林六君子」のこと。彼らが殺されたのは天啓5年 (1625)。

²⁵⁴ 万曆38年の進士合格者302に対し, 41年344, 44年344, 47年345。天啓2年409人, 5年300人。

²⁵⁵ 楊廷筠は漢文史料によれば, 高齢のために天啓5年に退職したとするのみである。N. Standaert, *Yang Tingyun, Confucian and Christian in Late Ming China: His Life and Thought*, Leiden, 1988, pp.83-84がこの史料を使っている。

鎮定されたこと²⁵⁶、コレアの近くの島に王から給金を受けた多くの兵を擁する将軍がタルタル人との戦争で成果を上げ、十分に報いられていなかったにもかかわらず、タルタル側からの連携の誘いを断って領土を奪い返したこと²⁵⁷、山海関外の寧遠を1625年12月にタルタル軍5万が攻撃し、北京にいたポルトガル人が指南した砲手が、オランダの難破船から得た大砲を使って敵の11000人を殺傷し、王はこの勝利に対して長官²⁵⁸に都堂の地位を与えたこと、1622年にオランダ人が福建海上に現れて交易を望んだが拒否され、ある島に上陸して家を作り、福建の都堂（巡撫）に使者を送ったが、都堂はプレゼントを焼き、オランダ人を殺し、また中国にやってきた連中は囚われ、北京に連れて行かれて1625年1月に首をはねられ、都堂は島に軍を送ったこと²⁵⁹など、帝国の北辺・西南・東南の各地が騒然としていた状況を伝える。

北京では友人の多くが党争により去り、会士（5人、うち神父3）にはより一層慎重な行動が求められた。南京の迫害の一因は宣教に慎重さを欠いたところにあり、彼らは同じ過ちを繰り返さないよう、信者の教会との往来を少なくして、神父や助修士が彼らの家を訪問した。すでに「われらの敵」沈（沈淮）は亡くなっていたが、その妻が宣教師の追放に功があった夫の公的葬儀を求めたものの、上奏は数学を学んでいる官僚にゆだねられ、彼が我々に影響が及ばぬよう処理してくれたという。

広東の都堂（両広総督）がマカオの城壁を撤廃させ²⁶⁰、ポルトガル人を中傷する上奏を行い、サン・パウロ（漢字では「三巴」）の神父たちが彼らと共謀していると指摘した。さいわい、都堂は弾劾の上奏により失職し²⁶¹、マカオに大砲を受け取りに派遣されたパウロとミゲル²⁶²を敵視した官人が北京の官に昇進し、マカオに対する中傷文書を出版して北京の高官に12部配ったが、相手にされなかった。

²⁵⁶ 少数民族の首領が起こした奢・安の乱のことである。

²⁵⁷ 毛文龍のことである。

²⁵⁸ 袁崇煥のことである。

²⁵⁹ 島とは澎湖諸島。福建巡撫南居益のオランダ人への対応については、拙著『中国近世の福建人』名古屋大学出版会、2012、pp.165-173を参照。

²⁶⁰ マカオをオランダ人が攻撃し、その後にポルトガル人が防護の城壁を築こうとしたところ、中国当局から待たされた。

²⁶¹ 『熹宗実録』巻58天啓5年4月癸卯条に両広総督何士晋が「外夷が畏服して自ら毀城を願いでた」とする上奏を載せる。同月に広西道試御史田景新が弾劾の上奏を行った（同辛丑条）。

²⁶² 徐光啓が派遣した孫学詩と張燾である。

江西の省都南昌でも、広東出身の都堂がポルトガル人や我々を敵視していたので²⁶³、行動は制限され、入信者は15人とどまった。一方、そこからかなり離れたところにある同省の建昌にも神父が駐在し、こちらは70人に授洗できた。紳士の信者たちは信心会を作ることを神父に望んだ。集会が禁止されていたので神父は消極的だったが、別の名目での結成を認め、祭礼には異教徒に気づかれないように集まることが指示された。

パウロ（徐光啓）の故郷上海での今年の入信者が181人。これまでの年報でも毎年彼のことを述べてきたが、ここでも述べないわけにはゆかないとして、一家の動静を記している。一方、杭州については、6人の会士を逗留させているミゲル（楊廷筠）が弾劾されたことで、レオン（李之藻）が神父たちとヨーロッパ人の修士1人を避難させたことなどを記す。

こうした旧来の拠点に加えて、新たに開かれた「山西省絳州のミッション」では神父1人がステファノ、トマスの進士の兄弟²⁶⁴の家に滞在し、首都から6日行程と遠くないため、集会には気をつけながら、数か月で200人を入信させ、「福建の首都福州のミッション」でも、新たな可能性について言及する。神父たちは広東から遠くなく、文人や官人が多く、海外との交流があつて外国人にも慣れている漳州に住院を作ろうと機会をうかがっていた。福州に帰郷した葉閣老（葉向高）はジュリオ・アレーニ神父を招いていたが、彼に対して批判する上奏がなされたために一度心変わりし、また

²⁶³ マカオに近い広東出身者は往々にしてポルトガル人やイエズス会士を目の敵にした。徐光啓が広東出身の官僚盧兆龍の主張を退けた上奏の翻訳がアジュダ文書に残っている。それだけ、マカオの人々やイエズス会にとってこの問題は大きなものだった。Ajuda Library, Jesuítas na Ásia, 49-V-9, 'Memorial do Mandarin Lico (吏科) Cantonista (広東人), chamado Lu chaolum (盧兆龍), natural da villa de Hiamxan (香山), que deo à el Rey em este principio de Julho de 1630. E a os 7 do do mez teve despacho Real,' 'Treslado do memorial Doutor Paulo (徐進士) em deffensa dos Portuguezes dado á el Rey em 12 de Julho de 1630: e aos 14 de ditto mez teve despacho real, que foram 5 da 6a lua anno tres de Sunchim (崇禎). A sustancia do memorial.' 『徐光啓全集』上海古籍出版社, 2010に董少新の翻訳が載るが、ところどころ誤りがある。たとえば、“os Portugueses desejão fortificar nosso imperio para resister aos Hollandeses”を「ポルトガル人が我々の帝国の境内でオランダ人に抗するために防御工事をおこなおうとしている」としているが、そうではなく、「我々の帝国を強化しようとしている」である。

²⁶⁴ 韓雲・韓霖兄弟のこと。彼らはドクトル=進士ではなく、挙人である。黄一農『兩頭蛇：明末清初的第一代天主教徒』国立清華大学出版社, 2005, pp.229-252.

アレニ来訪のことを葉から聞いた都堂は「われわれをオランダ人の同類とみなして」これに反対し、省都では Tecin²⁶⁵ という人物が信仰を中傷する本を出版し、官人たちに配ってまわり、これを読んだ者たちは布教に反対するようになった。しかし、葉の友人の信者メルショールのとりなしにより、葉はあらためて支援を約束し、神父とイエズス会を称賛する文章を書き、これを読んだ人々は「我々がオランダ人と同じではない」ことを知った。都堂もそれに納得し、中傷本を出した男のもとにはメルショールが向いて誤解を解き、残りの本を焼かせて、万事解決した。「陝西省のミッシェン」では、前年に刑部の官を務めていた王フェリペ（王徴）の家にトリゴ神父が6か月病臥していたが回復し、布教を始めた。当地で石の遺物が発見され、中国で古くから布教が行われていたことが明らかになった。レオンの友人がこの発見を知り、拓本を取ってレオンに送り、レオンがこれを出版、パウロも同じことをして我々に送り、ポルトガル語に翻訳するよう請うた、というのはむしろ「大秦景教流行中国碑」のことであり、最後は「トリゴ神父が石碑の現場に赴き、信用できる写しをとってきたら、お送りする。」と結ぶ。マヌエル・ディアスが、宣教師が中国に慣れるためのトレーニングの場所となっていた嘉定で執筆した。

本書は最後に、デッラ・ヴァッレがインドで会ったバルディノッティ神父による「新たに発見されたトンキンの旅の報告」を収録する。この旅がきっかけで、デッラ・ヴァッレのもう一人の友人ボッリが布教していたコーチシナ（ベトナム中部）についてトンキン（ベトナム北部）布教が開幕するのである。

以後も中国年報は執筆され続けたが²⁶⁶、出版されることはなかった。ローマのイエズス会文書館には、タイトル・ページを図案した年報が残っており²⁶⁷、出版が考えられて

²⁶⁵『聖朝佐闢』を著した許大受のことである。Tecin は彼の出身地徳清を人名と見誤ったものである。Eugenio Menegon, "Jesuit, Franciscans and Dominicans in Fujian: The Anti-Christian Incidents of 1637-1638," T. Lippiello and R. Malek eds., "Scholar from the West" Giulio Aleni S. J. (1582-1649) and the Dialogue between Christianity and China, Nettetal, 1997, p.222.

²⁶⁶前掲のアジュダ図書館の「アジアのイエズス会士」文書群あるいはローマのイエズス会文書館に年報の稿本や写本が残っている。ポルトガル人イエズス会士アントニオ・デ・ゴヴェアが書いた年報を校訂して公刊したのが、Horácio P. Araújo ed., *Cartas Anuas da China António de Gouvea*, Lisbon, 1998 である。

²⁶⁷ARSI. Jap-Sin. 118, ff. 1-34 にジョアン・モンテイロ執筆（1642.9.27）のイタリア語訳出版を準備したテキストを収める。

いなかったわけではないことを示している。しかし、中国関係のイエズス会の出版物は一部日本語訳もあるセメードの『チナ帝国誌』(*Imperio de la China*, Madrid, 1642)やマルティノ・マルティニの『タルタリア戦記』(*De bello tartarico*, Amsterdam, 1654)と、いずれもヨーロッパに派遣されたプロケラドールによる散発的なものである。また前者はリッチの『キリスト教遠征記』の続編という意味合いを持ち、リッチ同様に中国事情+宣教報告だが、関心もたれたのは前半の部分であり、後者は明清交代簡報であって、本書を読んでもあちこちに会士が散在していることはわかっても、宣教の状況は把握できない。

おわりに

デッラ・ヴァッレは、インドに来る前にペルシアのイスファハーンで日本人に出会っていた。1617年12月18日の書簡で、インドにおける偶像信仰に言及し、様々な考えがあることを話してくれたのが、「数か月前にここを通過した日本人ピエトロ・パオリノ・キベ(Pietro Paolino Chibe)である」と述べ、スキパーノにこの日本人はローマに勉学に向かったので、ナポリに立ち寄ることがあったらラテン語ができる彼からいろいろな話が聞けるだろうし、彼が筆で日本だけでなく中国の文字をたくさん書くのは見ものであると述べる²⁶⁸。

この日本人は、「巡礼者」とは逆方向から同じ聖地を目指していたペトロ岐部であった²⁶⁹。彼はこの後ローマに赴き、念願の司祭叙任とイエズス会入会を果たし、ふたたび日本へと戻ろうとする。その際に彼が同行したのが、既述のエチオピア宣教団であった。彼らのもとを訪れたデッラ・ヴァッレが岐部と再会する機会があってもよかりそうな

²⁶⁸ 1843 ed. vol.1, p.497. なお、旅行記のペルシア部分の前半について、検閲が入った稿本を翻刻した Franco Gaeta and Laurence Lockhart eds., *I viaggi di Pietro della Valle: Lettere dalla Persia, vol.1*, Roma, 1972 はこの日本人を「同定できない」とする (p.477)。

²⁶⁹ ペトロ岐部がインドからローマに向かった足跡を知る史料はイエズス会側には残っていない。イエズス会の史料を網羅して(前掲注21)、伝記を書いた五野井隆史『ペトロ岐部カスイ』教文館, 2008)をはじめ、日本キリシタン史研究者はこの史料に気づいていない。そのことはすでに拙稿「二人のペテロ」『図書』797, 2015, pp.20-24 で指摘したが、認知されていないようである。

ものだが、デッラ・ヴァッレはヨーロッパ人イエズス会士のことしか述べていない。

デッラ・ヴァッレは、翌年念願のシャー・アッパースとの謁見をカスピ海沿岸で果たし、カズヴィーンまで同行する。王にやや遅れて11月20日に同地を出発した時に彼は大彗星を目撃する。彼は「人々はこれを戦乱の兆しと受け取った」としか述べていないが²⁷⁰、天文学史上ガリレオの望遠鏡で初めて観測された彗星として名高い²⁷¹。当時、ゴアにいたキルヴィッツァーはこの彗星を観測し、のちにその記録は公刊された²⁷²。それによれば、彼はコーチンで彗星を観察していたアントニオ・デ・ルビーノと情報交換をしている²⁷³。ルビーノはのちに日本で殉教を遂げることになる。

また、デッラ・ヴァッレの友人ボッリは当時コーチシナで彗星を目撃していたが、彼の言によれば、マカオではウレマンがこれを目撃していたという²⁷⁴。ウレマンは前掲の年報著者である。

そして、本稿で取り上げた『日本・中国・ゴア・エチオピア年報』²⁷⁵でも、パエスのエチオピア年報で、年の終わりに二つの彗星²⁷⁶が出現し—「一つは西の空に一月半ほど見られ、もう一つは12月中アルキオーネの星のあたりに現れた」—そこから疫病が始まったとする (p.150)。

「日本各地からマニラに送られた書簡から集めた1618年の出来事」では、「今年、東方に数世紀見られなかったような凶兆が現れた。大きな変革の予兆であり、ずいぶん以前に異変は1620年に起こるとされていた。東方に2つの彗星が出現し、11月いっぱい空中にあった。1618年11月11日10時にマニラに彗星が現れ、三日月形からなぎなたのような形に変わり、ヤシの木の形になったこともある。19日に南の方に流れた。

²⁷⁰ 1843 ed. vol.1, p.838.

²⁷¹ Stillman Drake and C.D.O' Malley trans., *The Controversy on the Comets of 1618: Galileo Galilei, Horatio Grassi, Mario Guiducci, Johann Kepler*, Philadelphia, 1960.

²⁷² *Observationes cometarum anni 1618 factae in India Orientali a quibusdam S. J. mathematicis in Sinense regnum navigantibus.*

²⁷³ R.C.Kapoor, "Nūr ud-Dīn Jahāngīr and Father Kirwitzer: The Independent Discovery of the Great Comets of November 1618 and the First Astronomical Use of the Telescope in India," *Journal of Astronomical History and Heritage* 19-3, 2016, p.285.

²⁷⁴ id., p.291.

²⁷⁵ 注 160。

²⁷⁶ この年に現れた3つの彗星のうち、10月・11月に現れた2つを指す。

24日に別の彗星が現れ、両彗星は3か月の間空にあって、日本からの報告と同様な状況であった。モルッカでは11月8日に初めて目撃されたという。」と述べ、江戸等で怪事件が多発し、皇帝（将軍）が上京を取りやめ、長年江戸に住んでいるイギリス人²⁷⁷を呼び出し、何の前兆かと聞くと、イギリス人はヨーロッパのことだろうと答えた」と記し、「異端者」は神罰が下されていることを皇帝に告げる機会を生かそうとしなかったと記す（pp.364-371）。また、彗星の記事こそ出てこないが、中国の会士たちが1618年に数々の異変が起きているのを記していることはすでに見てきた。

むしろ、彗星を目撃したのは彼ら宣教師だけではなく、アジア人たとえばムガル皇帝ジャハングール²⁷⁸も関心を寄せているが、アジアの各地で活動している会士たちの共時性がうかがえるエピソードである。

本稿では、日本・エチオピア・中国の年報のうち、とくに1625、1626年のものを重点的に扱った。日本の長崎では新奉行の着任により迫害が一層厳しくなっていたが、エチオピアでは乗り込んできた総大司教が皇帝らお歴々の居並ぶ前でローマ教会の勝利を高らかに宣言し、中国では満洲人の侵入というある意味では天の配剤によってマカオの大砲がキリスト教会の復活を促進する格好となっていた。こうした三者三様の展開があったころ、デッラ・ヴァッレは12年の旅を終えて故郷ローマに帰還した。

彼がまずやったのは、4年以上も行をともした妻の亡骸をカトリックの教会に葬ることであった。この時の葬礼を記念した書物を出版しているが、各国語による追悼の辞をちりばめた本書は、妻だけではなく諸国の人々がローマ教会に「帰順」することを願う彼のメッセージと受け取ることもできる²⁷⁹。出版社はバルトロメウ・ザネッティの相続人であった。

デッラ・ヴァッレはペルシアで引き取ったジョージア人の孤児と結婚するが、テアティノ会士が布教聖省によってジョージアに送り込まれると、ペルシアで得た情報をもとに彼らに助言を贈るとともに、夫婦でジョージアの君主夫妻に書簡を送ってもい

²⁷⁷ ウィリアム・アダムスであろう。

²⁷⁸ R.C.Kapoor, *op. cit.*

²⁷⁹ *Funerale della Signora Sitti Maani Gioerida Della Valle. Celebrato in Roma l'Anno 1627. E descritto dal Signor Girolamo Rocchi* 【G】. Christelle Baskins, "Lost in Translation: Portraits of Sitti Maani Gioerida della Valle in Baroque Rome," *Early Modern Women* 7, pp.241-260 を参照。

る²⁸⁰。

彼と東方宣教について関心を共有し、接触もあった布教聖省の秘書フランチェスコ・インゴリ²⁸¹は1631年に脱稿したとみられる、宣教の世界戦略を示した『世界の四部分の記述』（未刊）²⁸²の「アジア」において日本・中国、「アフリカ」でエチオピアを取り上げた。

「諸地域の総まくり」という本書の性格にもよるが、ここでは日本に突出した地位は与えられていない（pp.149-152）。宣教の歴史を簡単にたどった後、迫害にはオランダ人やイギリス人の画策も作用していたとしつつ、「最新の諸書簡」によれば、オランダ人の陰謀が露見し、彼らが追放された²⁸³という記事で締めくくられる。「邪魔者が追放されたから明るい展望が開ける」といった楽観的記述はない。中国については、タルタル人を砲術支援により撃退したことがプラスに作用して1627年には内地の会士が23人に達したこと、宮廷では数学によって王の心をとらえていること、最後に景教碑が発見され、マカオで神父たちが1627年に注釈付きで碑文が公刊され全王国に頒布することで信仰に大いなる進展が得られると期待していると記す（pp.131-133）。

一方、エチオピアはキリスト教の歴史自体が古く、アフリカでも特別な存在なので記述量も多い（pp.210-219）。近時の展開として年報にも載ったメンデスの1626年6月1日書簡にも言及しつつ、28年には21人の神父が170000人を入信させたとし、さらなる進展のために教義書等を「アビシニア語の文字」で印刷すること、年報にも記されていた宣教師派遣のルートを記すなど、インゴリの姿勢は三者の中でも一番前のめりであるようにみえる。皇帝が旧教会の前に屈するのは三年先なのでこのように明るい展望を持つのも当然だろうが、日本の記述の後にアジアの総括として「これほど豊かな土地にしては収穫が少なすぎて驚く」と述べた後に、その理由としてポルトガル王権との密接が現地政権の疑惑を招いたことに続けて、宣教師の人手不足、司教の派

²⁸⁰ D.F.Abreu, “Carteggio inedito di Pietro della Valle col P. Avitabile e i Missionari Teatini della Georgia,” *Regnum Dei* 6, 1950, pp.57-99. 7, 1951, pp.19-50, pp.119-138.

²⁸¹ 前掲注37のローマ帰還後の日記にはインゴリの名がみえる。デッラ・ヴァッレは布教聖省から東方布教の諮問のために呼び出されていた（pp.64, 126）。

²⁸² Fabio Tosi ed., *Francesco Ingoli Relazione delle Quattro Parti del Mondo*, Roma, 1999.

²⁸³ 追放されたのは事実ではないが、台湾で起きた浜田弥兵衛事件により、オランダ人は窮地に陥っていた。

遣による現地人司祭の叙任の必要性を説いていることからわかるように、エチオピアに司教が送り込まれたことが、彼我の展望の差となっているとみることもできる。

しかし、その司教も迫害によって退去を余儀なくされ、改宗した聖俗も大多数は旧来の信仰に戻った。一方、中国内地には布教の基地であるコレジオが作られたこともなければ、この時点で司教が置かれたこともなかったが、明朝末期の党争・満洲人の侵入・内乱の発生といった外的事情に揺さぶられつつも着実に教線を拡大していった。その進展を伝える年報も継続して書かれた。

しかし、それらが出版されることはなかったのである。つまり、福音に対する門戸の開閉にかかわらず、イタリア語公刊年報はその使命を終えたのであった。このことをどう考えたらよいのであろうか。

出版社の事情が作用していた可能性はある。ローマのイエズス会年報出版を担ってきたザネッティ家の独占市場に終盤でコルベレッティが参入していることが関係していたかもしれない。しかし、年報はイエズス会の総本部の検閲のもとで刊行されており、会に出す気があれば、出版元を代えれば済む話であろう。

やはり、イエズス会も、そして市場ももはやこうした形態の出版を求めてはいなかったとみるべきであろう。イエズス会士の活動を記した書物それもイタリア語の書物が出なかったわけではない。アントニオ・カルディンの『日本管区報告』をローマ・ミラノでギソルフィが1645年に刊行し²⁸⁴、フランス語にも翻訳された。しかし、これは日本管区、実態はそこから派生した東南アジアの宣教状況を概観したものであって、年報のようなものではない。同年にローマの出版社フランチェスコ・カバリが刊行した、カルディンと同じくプロクラドルであったフランチェスコ・バレットの著『マラバル管区のミッションとキリスト教』²⁸⁵も同様である。

考えてみれば、読者にとって、年報とは決して読みやすいものではない。もともと

²⁸⁴ *Relazione della Provincia del Giappone, scritta dal Padre Antonio Francesco Cardim della Compagnia di Procuratore di quella Provincia* 【B】。カルディンの著述の全体については、阿久根晋「『キリシタン世紀』終焉期のイエズス会日本管区：ミッション・インテリジェンス・ヒストリオグラフィー」京都大学博士論文, 2022 がある。

²⁸⁵ *Relazione delle missioni e christianità che appartengono alla Provincia di Malavar della Compagnia di Giesu. scritta dal P. Francesco Barretto dell' istessa Compag. Procuratore di quella Provincia* 【G】

の読み手は表題にも示されるとおりイエズス会総長なのであり、一般読者に向けてある地域の状況を一から教えてくれるものではない。また、前の年報を読んでいることが前提になっているため、ある年のものを抜き出して読んだだけではよくわからないところもある。リッチやセメードの書がよく読まれたのは、中国社会の事情を手際よくまとめているからであって、そうしたものを年報に求めることはどだい無理なのである。たしかに、年報とくに原本には、董少新が指摘するようにリッチやセメードには載らないような事柄が多くみられ、歴史研究にとって貴重な材料であるには違いないが、それは当時の読者が求めていたものとはまた違うであろう。

しかし「年報熱」と呼ぶべき時期は確かに存在した。総年報がもっぱら内輪向けの出版であり、しかも長続きしなかったのに対し、こちらは俗語による出版であり、イエズス会の内外にそしてイタリア人以外のヨーロッパの読者に広く迎えられた時期があったことは確かなのである。それは読み物としての出来による、というよりもイエズス会が世界各地に進出していった共時性を体感させてくれるものであったろうし（日本年報単独の刊行もあるが、同時に抱き合わせ出版も多かった）、イエズス会の世界展開が一つのピークに達したことを示してもいた。

17世紀中葉には、会の修史官ダニエッロ・バルトリにより、『アジア』『チナ』『ジャッポーネ』といったよく知られる作品が出版されるが、これらは会の歴史を回顧するものであって、今を語るものではなかった。そして、他国語に翻訳されるようなものでもなかったのである。